2014年度

山口大学医学部医学科・附属病院

Yamaguchi University Faculty of Medicine and Health Sciences
Yamaguchi University Hospital

教室紹介

01 基礎系（基盤系）分野

02 臨床系（展開系）分野

03 基礎系（基盤系）、臨床系（展開系）以外の分野

04 大学院

YAMAGUCHI UNIVERSITY
山口大学

目　次

1 はじめに ……2
2 教育研究分野一覧 ……3
3 教室紹介

基礎系 (基盤系) 分野

器官解剖学分野 ……4
機能神経解剖学分野 ……5
生体機能分子制御学分野 ……6
システム神経科学分野 ……7
プロテオーム・蛋白機能制御学分野 ……8
医化学分野 ……9
分子薬理学分野 ……10
病理形態学分野 ……11
分子病理学分野 ……12
ゲノム・機能分子解析学分野 ……13
環境保健医学分野 ……14
環境統御健康医学分野 ……15
法医・生体侵襲解析医学分野 ……16
免疫学分野 ……17

臨床系 (展開系) 分野

消化器病態内科学分野 ……18
器官病態内科学分野 ……19
病態制御内科学分野 ……20
神経内科学分野 ……21
高次脳機能病態学分野 ……22
小児科学分野 ……23
器官病態外科学分野 ……24
消化器・腫瘍外科学分野 ……25
整形外科学分野 ……26
皮膚科学分野 ……27
泌尿器科学分野 ……28
眼科学分野 ……29
耳鼻咽喉科学分野 ……30
放射線医学分野 ……31
放射線治療学分野 ……32
産科婦人科学分野 ……33
麻酔・蘇生・疼痛管理学分野 ……34
脳神経外科学分野 ……35
歯科口腔外科学分野 ……36
臨床検査・腫瘍学分野 ……37
救急・生体侵襲制御医学分野 ……38
総合診療医学分野 ……39
医療情報判断学分野 ……40
臨床薬理学分野 ……41

基礎系(基盤系),臨床系(展開系)以外の分野

生命実験医学分野 (生命科学実験施設)…42
医学教育センター ……43
地域医療推進学講座 ……44

4 大学院について ……46
5 学位について ……48
6 機構図 ……49

は　じ　め　に

私たちが幸福な人生を送るための条件の一つとして、健康があります。長い医学の歴史を通じて、私たちの先人は一つ一つ人間の体の神秘を解明し、健康を回復させるための方策を模索してきました。現在の医学は多くの病気を克服してきましたが、しかしまだまだ解明できていない疾患の長いリストが残っています。

医学の基本は人間を理解することです。生物の進化を考えるとき、私たちの体の中には進化の歴史が全て何らかのかたちで凝縮されていますから、この地球上に存在する“すべての生物の仕組み”を知ることが人間の仕組みを理解するために必要です。同時に人間が築き上げてきた“人間の全ての営み”をも理解する必要があります。経済学、社会学的な観点、文学、音楽、絵画などの芸術的な観点、あるいは工学的な観点から眺めた極めて幅広い知恵が必要です。患者さんが私たちを信頼してくださるのは、一人一人の医師の医学的な知識や技能のみでなく、その医師の人間としての幅の広さと奥行きもではないかと考えます。医学部での教育は極めて幅広く、一見関連性がないように感じるときがあるかもしれません。しかし、諸君は医学を志しているのですから、“生物の仕組み”と“人間の営み”の全てに興味を持っているはずです。

山口大学医学部医学科では、基礎医学講座と臨床医学講座が協力して学生諸君の教育に全力を傾けています。より良い教育方法やカリキュラムを求めて積極的に見直しをしています。３年生の後期に「自己開発コース」という独自のカリキュラムを設け学生自身の自由な発想に基づいた教育も行われています。またさらに、国立大学の医学部では初めての高度救命救急センターが設置され、総合治療センター、総合診療部、総合周産期母子医療センター、医療情報部などにおいて、横断的にまた集学的な教育が行われています。テュートリアル制の授業も加わり、教員と学生とが密に話し合える場が広がってきました。しかしながら、全ての学問を縦断的なおかつ横断的に教育することは不可能です。学生諸君の頭の中で、縦断的な知識を横断的に理解し、また横断的な知識を縦断的に理解し直すことが要求されます。

この冊子が、山口大学医学部医学科および附属病院の各分野においてどのような活動が現在行われているかに関する情報を学生諸君に提示し、諸君の医学に対する考え方の再構築の助けになることを願っています。学生諸君の全ての相談にのることが私たち学生部委員の仕事です。気軽に相談に来てください。山口大学医学部の将来を決めるのは諸君です。

平成 26 年 7 月

医学部学生部委員

鶴田　良介

田邊　剛

教育研究分野一覧

	分野名		旧講座名
基礎系（基盤系）	器官解剖学分野	Organ Anatomy	解剖学第一
	機能神経解剖学分野	Functional Neuroanatomy	解剖学第二
	生体機能分子制御学分野	Molecular Physiology and Medical Bioregulation	生理学第一
	システム神経科学分野	Systems Neuroscience	生理学第二
	プロテオーム・蛋白機能制御学分野	Biochemistry and Functional Proteomics	生化学第一
	医化学分野	Biochemistry and Molecular Biology	生化学第二
	分子薬理学分野	Molecular Pharmacology	薬理学
	病理形態学分野	Pathology	病理学第一
	分子病理学分野	Molecular Pathology	病理学第二
	ゲノム・機能分子解析学分野	Genomics and Infectional Proteomics	微生物学
	環境保健医学分野	Hygiene	衛生学
	環境統御健康医学分野	Public Health	公衆衛生学
	法医・生体侵襲解析医学分野	Legal Medicine	法医学
	免疫学分野	Immunology	寄生体学
臨床系（展開系）	消化器病態内科学分野	Gastroenterology and Hepatology	内科学第一
	器官病態内科学分野	Medicine and Clinical Science	内科学第二
	病態制御内科学分野	Endocrinology, Metabolism, Hematological Sciences and Therapeutics	内科学第三
	神経内科学分野	Neurology	神経内科学
	高次脳機能病態学分野	Neuropsychiatry	神経精神医学
	小児科学分野	Pediatrics	小児科学
	器官病態外科学分野	Surgery and Clinical Science	外科学第一
	消化器・腫瘍外科学分野	Digestive Surgery and Surgical Oncology	外科学第二
	整形外科学分野	Orthopedic Surgery	整形外科学
	皮膚科学分野	Dermatology	皮膚科学
	泌尿器科学分野	Urology	泌尿器科学
	眼科学分野	Ophthalmology	眼科学
	耳鼻咽喉科学分野	Otolaryngology	耳鼻咽喉科学
	放射線医学分野	Radiology	放射線医学
	放射線治療学分野	Therapeutic Radiology	
	産科婦人科学分野	Obstetrics and Gynecology	産科婦人科学
	麻酔・蘇生・疼痛管理学分野	Anesthesiology	麻酔・蘇生学
	脳神経外科学分野	Neurosurgery	脳神経外科学
	歯科口腔外科学分野	Oral and Maxillofacial Surgery	歯科口腔外科学
	臨床検査・腫瘍学分野	Oncology and Laboratory Medicine	臨床検査医学
	救急・生体侵襲制御医学分野	Emergency and Critical Care Medicine	救急医学
	総合診療医学分野	General Internal Medicine	
	医療情報判断学分野	Medical Informatics and Decision Sciences	
	臨床薬理学分野	Clinical Pharmacology	
基礎系（基盤系），臨床系（展開系）以外の分野	生命実験医学分野(生命科学実験施設)	Institute of Life Science and Medicine	
	医学教育センター	Center for Medical Education	
	地域医療推進学講座	Community Health and Medicine	

器管解剖学分野（旧 解剖学第一）
Organ Anatomy

HP http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~org-anat/　✉ org_anat@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日現在

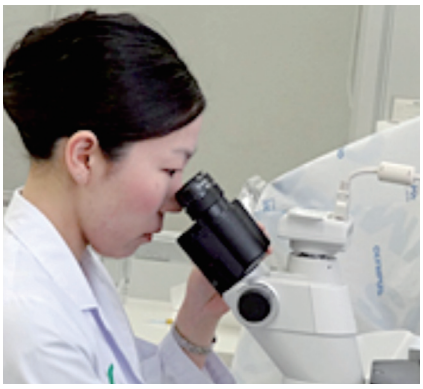
教授名	大和田 祐二
分野のメンバー	大和田 祐二、澤田 知夫、山本 由似、香川 慶輝
医学科担当科目	組織学実習、統合組織学演習、肉眼解剖学実習、発生学、基礎生命実験医学、血液・免疫系、消化器系、泌尿・生殖器系、内分泌系、基礎解剖生理学序説、重点統合、自己開発コース、修学論文テュートリアル、Open Science Club、SCEA/AMRA
居室	基礎研究棟４階
TEL	0836-22-2202　FAX　0836-22-2203

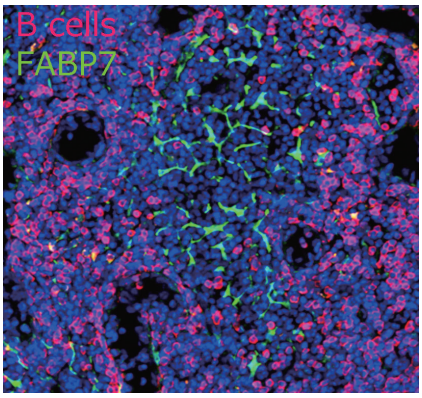
分野の紹介

当分野では、解剖学を通じて次代を担う優れた人材を育成することが重要な責務だと考えています。肉眼解剖学実習や、組織学実習、医学生のための臓器別講義、医学英語では、刻々と変化する医療情勢に対応でき、臨床医学につながる専門知識と技術を伝えることを目指しています。また、学習や研究を進めてゆく過程で、豊かな人間性・創造性を持った医療人・研究者を育成することを心がけています。

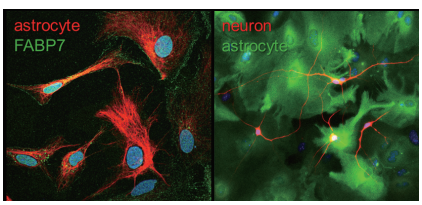
研究面については、解剖という枠にとらわれず、形態学から分子生物学的解析に至るまで、種々の手法を駆使して研究を行っています。特に注目しているのは、体内の様々な細胞が脂質の恒常性を維持するために持っているしくみです。中でも、水に不溶な長鎖脂肪酸に結合し、その機能を発揮する上で必須である脂肪酸結合蛋白質(FABP)の研究を中心に行っています。我々の研究結果から、脳に発現するFABPのノックアウトマウスが情動系の行動異常を示し、ヒト精神疾患の病態解明のための有力なモデルとなる可能性が示されました。また、免疫系細胞に発現するFABPが欠損するとサイトカイン産生が変化し、免疫応答の異常が見られることなど、ヒトの疾患に応用可能な知見を明らかにしてきました。神経系や免疫系における脂質の関与に着目しながら、動物モデルを基盤にヒトの疾患に迫るアプローチを精力的に続けています。そして、医学系研究科内の先生方のみならず、他の大学、研究施設、企業と広く提携しながら、近年急速に注目を集めている脂質摂取と疾患について、国内外で幅広い共同研究を展開しています。

この分野で真摯に研究に取り組みたいという方は、ぜひ私たちに連絡してください。


脂質の動きを培養細胞で調べる



脂質恒常性の免疫系への影響を調べる



脂質恒常性の意義を神経系で調べる

機能神経解剖学分野（旧 解剖学第二）
Functional Neuroanatomy

HP http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~kaibou2/　kaibou2@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日成現在

教授名	篠田 晃
分野のメンバー	篠田 晃、早坂 直人、藤永 竜太郎、柳井 章江、國分 啓司
医学科担当科目	基礎解剖生理学序説、外皮筋骨格系、肉眼解剖学実習、組織学実習、感覚器・末梢神経系、中枢神経系，脳実習、重点統合、基盤系特別専門講義、自己開発コース、修学論文チュートリアル、Open Science Club、SCEA/AMRA
居室	基礎研究棟４階
TEL / FAX	0836-22-2206 / 0836-22-2205

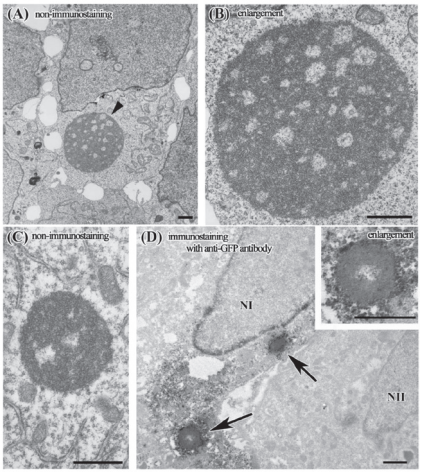
分野の紹介

私達の研究室では、脳と心の関係を視野に入れ、辺縁系・視床下部の神経解剖学を基盤に、情動構造と神経変性疾患の脳科学的解明を目指しております。具体的には、ステロイド・モノアミン系、辺縁系特異構造、嗅覚系の3つの課題を設定しています。

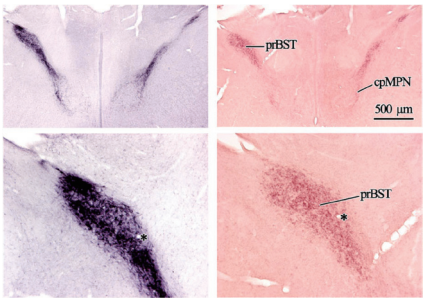
初めに、情動構造の解析の突破口として、情動二分化の典型として脳の性分化をとりあげ、その解明に挑んでいます。脳の性分化には、遺伝的要因、ホルモン等を中心とした内部環境要因、自然環境・社会環境らの外部環境要因が関わり、特に性ステロイドは決定的な影響を持ちます。研究室では、哺乳類脳の性分化の中心領域である内側視索前野・扁桃体領域にアンドロゲンをエストロゲンに変換するアロマテース(芳香化酵素)を発現する膨大な数のエストロゲン合成ニューロンが存在することを世界で初めて証明しました。この領域には、性差を伴うアンドロゲン受容体とエストロゲン受容体が豊富に発現します。アロマテースは、性ステロイドでup regulationを受ける一方、局所的に性ステロイド環境を制御することで、逆にこれら受容体発現を制御しており、脳のホルモン感受性を変えて脳の性分化を促進するという仮説を立てて研究を進めております。特に、モノアミン系やアセチルコリン系等の活動調整系との関係に注目しております。

また、性ステロイド受容体発現細胞にしばしば共存し、視床下部・辺縁系に特異的に分布する細胞質封入体“斑点小体stigmoid body(STB)”を発見・同定し命名しました。STBがHAP1をコア蛋白質として、その遺伝子導入により誘導されることを示し、ハンチントン病の保護因子である可能性を指摘しました。さらに、HAP1/STB がアンドロゲン受容体を吸着して核内移行を制御し、別のポリグルタミン病である球脊髄性筋萎縮症(SBMA)で起こるアポトーシスも抑制することを発見しております。現在、「HAP1/STB 保護仮説」が脊髄小脳変性症や認知症、その他精神疾患などの背景の病態に対しても成立することを検証しており、今後、世界的に発展した研究になることを期待しております。

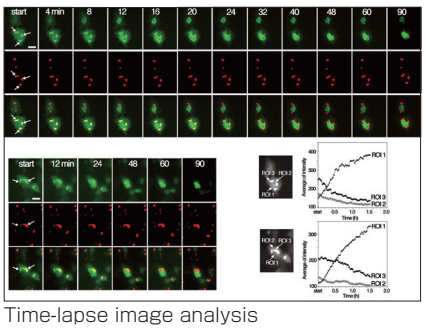
第三は、やはり当教室が発見し命名した一次嗅覚系単位「ネックレス型糸球体」の研究であります。この構造は、世界で最初に同定された嗅覚系単位で、当初、哺乳行動誘発系の1次嗅覚単位として注目され、最近では二酸化炭素受容体の1次嗅覚系単位であると報告され、多くの総説で取り上げられ、嗅覚研究者ではよく知られた存在になっています。



Electron microscopy



Immunohistochemistry and In situ hybridization



Time-lapse image analysis

生体機能分子制御学分野（旧 生理学第一）

Molecular Physiology and Medical Bioregulation

HP http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~lily/　　lily@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日現在

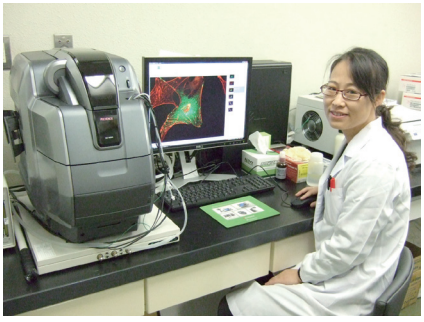
教授名	小林 誠（こばやし せい）
分野のメンバー	小林 誠、岸 博子、張 影
医学科担当科目	医学入門 1、英語特別演習、基礎解剖生理学序説、循環・呼吸器系、消化器系、泌尿・生殖器系、機能系実習、細胞生理化学演習、基盤系特別専門講義、自己開発コース、修学論文テュートリアル、Open Science Club、SCEA/AMRA
居室	基礎研究棟 3 階
TEL / FAX	0836-22-2209 / 0836-22-2348

分野の紹介

わが国において、脳卒中や心筋梗塞など重要臓器の血行障害による疾病が死因の上位を占め、これらを合計すると、悪性新生物と並んで死因の第2位となります。そのため、これらの血管病の原因や病態を解明し、予防法や治療法を開発することが、まさに、社会医学上の最重要課題であるといえます。これらの血管病の本態は、血管系細胞の機能を制御する細胞内情報伝達機構の破綻によって、細胞の機能障害が発生することにあります。したがって、本分野では、これらの血管病の原因となる細胞内情報伝達機構とその機能分子を同定する研究を行っています。これまで、生体細胞・組織標本で細胞内情報伝達を検索する独自の分子細胞生理学的研究手法を開発することによって、新しい情報伝達機構を見出してきた実績を持っています。最近では、組織、細胞、分子・遺伝子レベルで解析するための分子細胞生物学的手法に加え、蛋白質工学や細胞工学、および2種類の最新型質量分析計を主軸とした機能プロテオミクス（写真上）、1分子可視化と高速イメージングを可能にした蛍光顕微鏡（写真中央）、細胞のイメージに加え、サイズ、形状、個数、差、比率などの多種類の数値データを同時取得できるリアルタイムアナリシス機能を搭載した全自動・細胞画像解析装置などを取り入れた新しい実験システムを構築することによって、血管の異常収縮を引き起こす新規の病的因子を次々に同定し、また、血管の異常収縮を特異的に抑制する脂質メディエーターを同定し、これらの作用の分子機構を解明しようとしています。更に、我々は、細胞内情報伝達における細胞膜ドメインの重要性に注目しており、生体細胞電子顕微鏡を駆使した細胞膜ドメインのイメージングや、表面プラズモン共鳴法によるドメイン内新規シグナル分子間の相互作用解析（写真下）を進めています。

また、血管異常収縮の病的シグナル経路を特異的に阻害する薬物の探索を精力的に行っており、最近、血圧維持を担う血管の正常収縮には影響を与えず、血管異常収縮のみを特異的に抑制できる注射薬を発見し、臨床治験に向けて研究を進めているところです。さらに、このような血管異常収縮の特効薬としての作用を有する食品成分を探索し、いくつかの候補成分の同定に成功しました。病気になった“後”でないと服用できない医薬品と異なり、食品であれば、病気になる“前”に摂取できるため、血管異常収縮の特効薬成分を含む食品により、血管病の真の予防が可能となることを期待しています。

質量分析計（岸准教授）



蛍光顕微鏡（張助教）

分子間作用解析計

システム神経科学分野（旧 生理学第二）
Systems Neuroscience

HP http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~seiri2/　　seiri2@yamaguchi-u.ac.jp

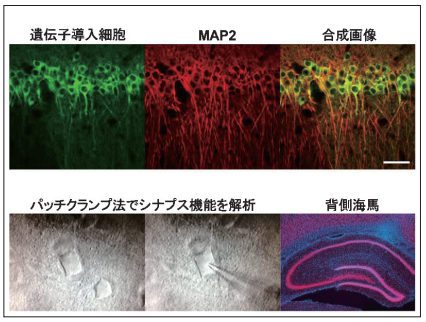
平成26年5月1日現在

教授名	美津島 大
分野のメンバー	美津島 大、木田 裕之、石川 淳子、﨑本 裕也
医学科担当科目	内分泌系、中枢神経系、自己開発コース、修学論文テュートリアル Open Science Club、SCEA/AMRA
居室	基礎研究棟 3 階
TEL	0836-22-2211　FAX　0836-85-3726

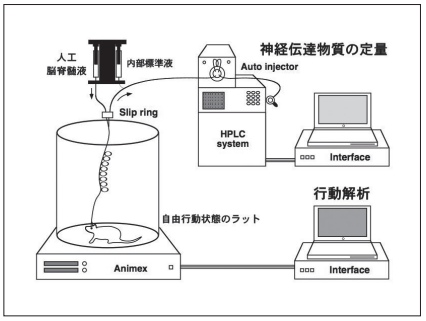
分野の紹介

皆さんはそれぞれ、過去に経験した重大な出来事について、「いつどこで何をしていたか」「自身の感情がどの様な状態であったか」を鮮明に記憶していると思います。脳は環境から様々な情報を受け取り、海馬は上記のエピソード記憶の形成に中心的役割を持ちます (Scoville and Milner, 1957)。海馬には、自分の位置に関する情報 (Wills et al, 2010)、一日の時間に関する情報 (Mitsushima et al, 2009)、自身の情動に関する情報 (Chen et al, 2009)が集まっていることが解ってきました。また、特定のエピソードの記憶と想起の両方の反応するニューロン群も存在します (Gelbard- Sagiv et al, 2008)。我々の研究で、海馬のCA1ニューロンにおけるAMPA受容体の興奮性シナプスへの移行がエピソード維持に必要であることも解りました (Mitsushima et al, 2011)。さらに、エピソード学習はAMPA受容体を介する興奮性シナプスのみならず、GABA$_A$受容体を介する抑制性シナプスも多様に強化するため、一つ一つの海馬ニューロンは多様なシナプス入力を示しました (Mitsushima et al, 2013)。ただ、記憶断片がどの様に統合され一つのエピソードとなるのか?統合的な記憶のメカニズムはほとんど解っていません。

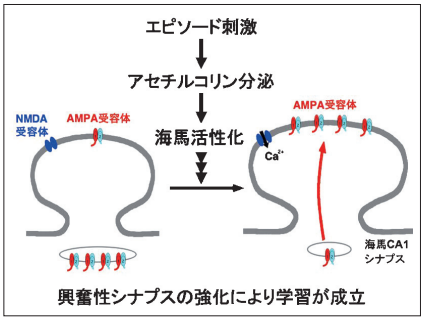
本研究室では、ラットを用いて遺伝子導入や学習実験を行い、スライスパッチクランプ法、in vivo ニューロン発火活動記録法、in vivo マイクロダイアリシス法を用いて、学習や記憶のシナプス・分子レベルでの機序解明を目指しています。



遺伝子導入法とパッチクランプ解析



In vivoマイクロダイアリシス法



海馬学習のシナプス・分子メカニズム

References
Scoville WB & Milner B. J Neurol Neurosurg Psychiatry, 20: 11-21, 1957.
Wills TJ, Cacucci F, Burgess N, O'Keefe J. Science, 328: 1573-76, 2010.
Mitsushima D, Takase K, Funabashi T, Kimura F. J Neurosci, 29: 3808-15, 2009.
Chen G, Wang LP, Tsien JZ. PLoS ONE, 4: e8256, 2009.
Gelbard-Sagiv H, Mukamel R, Harel M, Malach R, Fried I. Science, 322: 96-101, 2008.
Mitsushima D, Ishihara K, Sano A, Kessels HW, Takahashi T. Proc Natl Acad Sci USA, 108: 12503-508, 2011.
Mitsushima D, Sano A, Takahashi T. Nature Communications, 4: 2760doi:10.1038/ncomms3760, 2013.

プロテオーム・蛋白機能制御学分野（旧 生化学第一）

Biochemistry and Functional Proteomics

HP http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~biochem1/ ✉ biochem1@yamaguchi-u.ac.jp

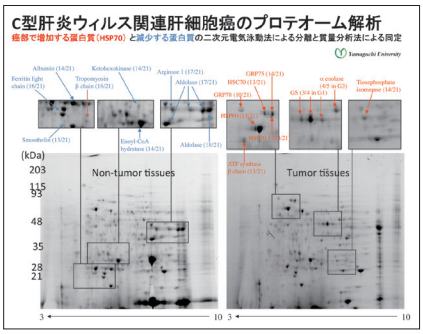
平成26年5月1日現在

教授名	
分野のメンバー	藏滿 保宏、古元 礼子、北川 孝雄
医学科担当科目	医学入門 1、基礎生化学序説、外皮筋骨格系、消化器系、血液・免疫系、細胞生物エネルギー学、生化学実習、重点統合、基盤系特別専門講義、自己開発コース、修学論文テュートリアル、Open Science Club、SCEA/AMRA
居室	基礎研究棟 2 階
TEL / FAX	0836-22-2213 / 0836-22-2212

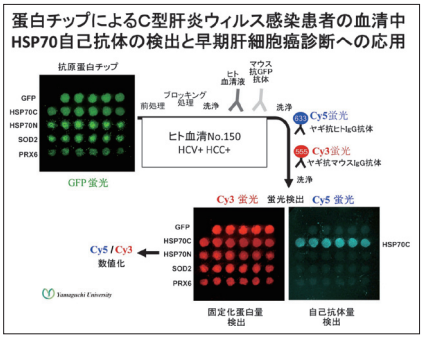
分野の紹介

生命の単位は細胞です。ヒトが健康に生きて行くためには、60兆個にも及ぶ多種多様な細胞が互いに連携して個体としての調和を保つことが必須です。細胞の生命は、その複雑な構造やエネルギー代謝さらには複製の機構などによって支えられています。その生命システムは遺伝子の産物であるタンパク質によって担われています。21世紀にはヒトのゲノムを構成する全ての遺伝子が解読され、それら遺伝子の産物であるタンパク質群(proteome, プロテオーム)の立体構造や局在あるいは機能制御が網羅的に解析されて生命システムが分子レベルで明らかにされると考えられています。さらには、ヒトのプロテオームデータベースが構築されて、医学・医療の分野で活用されると期待されています。

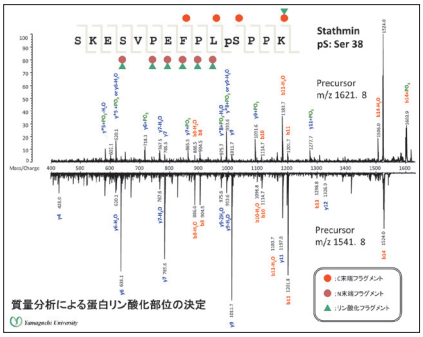
当分野は、研究活動において、国際共同研究プロジェクトであるヒトプロテオーム計画を推進するために、ヒトプロテオーム機構の運営に参画して、国際協力による世界水準のデータベースの構築を行っています。また、教育では、基礎生化学や細胞生物医学科目コース(細胞構造生理学、生物エネルギー学、生化学実習)、重点統合科目の免疫学や発生・加齢科学の演習、自己開発コースの生化学研究コースや海外ボランティアコースなどを担当しています。



C型肝炎ウィルス関連肝細胞癌のプロテオーム解析



蛋白チップによる血清中HSP70自己抗体の検出



質量分析による蛋白リン酸化部位の決定

医化学分野（旧 生化学第二）
Biochemistry and Molecular Biology

HP http://ds22.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~seika2/　seika2@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日現在

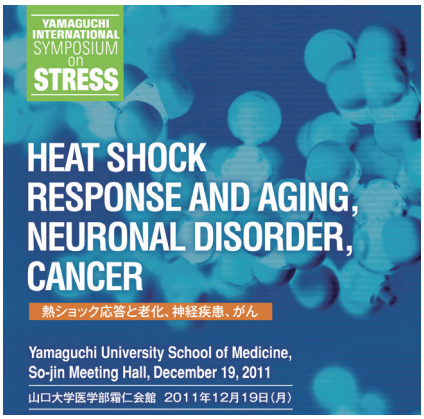
教授名	中井 彰
分野のメンバー	中井 彰、藤本 充章、林田 直樹、瀧井 良祐
医学科担当科目	基礎生化学序説、分子細胞生物学、発生学、遺伝子病態学、細胞生理化学演習、生化学実習、基礎系特別専門講義、自己開発コース、修学論文チュートリアル、Open Science Club、SCEA/AMRA
居室	基礎研究棟２階
TEL	0836-22-2215　FAX　0836-22-2315

分野の紹介

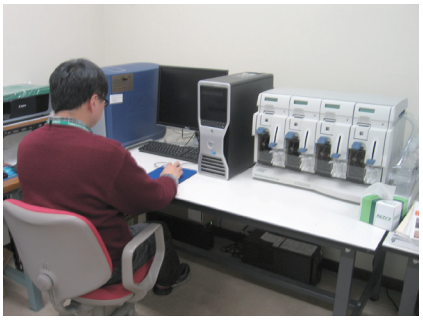
生命科学のめざましい発展により、私たちのからだの様々な形態や機能をもつ臓器は、共通な分子の働きによって営まれる細胞の集団として捉えられるようになってきました。それに伴い、現在の医学では、病気がひき起される原因を核酸やタンパク質などの分子のレベルで理解することが求められています。その理解は病気の診断と治療の開発につながるために、分子レベルでの病態解明は臨床に直結する時代となりました。私たちの教室では、教員が一丸となって、学部や大学院教育を通して医学の進展を支える生化学?分子生物学の重要性を伝えられるよう努力しています。

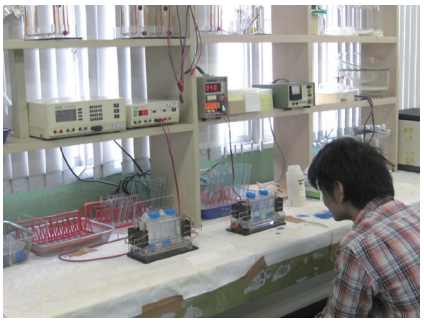
学部教育では、分子細胞生物学ユニットを中心に講義を行っています。当該ユニットは、どの講義の内容も先人が切り開いたノーベル賞級の発見が基盤となり、教科書レベルの知識として定着していることを力説しています。さらに、病気の理解に欠かせない最先端研究も取り上げ、生命や病気の理解が時代とともに変化していることを実感してほしいと考えています。当該ユニットを修得した後は、細胞生理化学演習ユニットでいくつかの病気に焦点を当てて、発展的な自主学習を促します。生化学実習を含めた一連のユニットを通じて、学生が医学に必要な基本的な原理や原則等を理解することを目標としていますが、一人でも多くの学生が自分の研究で新しい分野を切り開きたいという思いが芽生えることも期待しています。この時期に、科学的な視点で論理的に病気を捉える視点を修得することで、将来医師として的確な判断ができるようになると考えています。

これら教育の科学的な裏付けとなるのが研究活動です。私たちは、一貫して温熱ストレスに対する適応の仕組み（熱ショック応答とよばれる）が、私たちの健康にとっていかに重要な役割を担っているかを明らかにしてきました。この生物に普遍的な適応機構は、異常な細胞内タンパク質を修復する仕組みの中で最も重要なものの一つです。ここ10年ほどで、熱ショック応答によるタンパク質恒常性の調節が、「老化および老化と関連する神経変性疾患等の病気の抑制」に重要な仕組みであるという概念が確立されました。「がん」の発症と維持にこの応答が利用されていることも明らかにされ、その治療ターゲットとしても注目されています。私たちが世界ではじめて明らかにした新規の分子機構や、新たに作製した遺伝子改変モデルマウスや実験材料が、国内外の様々な医学領域の研究者との共同研究に発展し、この仕組みの生理過程及び病理過程における役割の理解、さらには病気の治療法の開発に貢献してきたことは、研究者としての大きな喜びです。医学・生命科学の新しい未来への扉をあけたいという夢をもつ大学院生及び学部学生の参加を期待しています。



国際シンポジウム開催


遺伝子発現解析


タンパク質解析

分子薬理学分野（旧 薬理学）
Molecular Pharmacology

HP http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~yakuri/　　molpharm@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日現在

教授名	乾 誠
分野のメンバー	乾 誠、倉増 敦朗、本田 健、酒井 大樹
医学科担当科目	医学入門 1、内分泌系、機能系実習、統合薬理学、細胞生理化学演習、自己開発コース、修学論文テュートリアル、Open Science Club、SCEA/AMRA
居室	医学部本館 5 階
TEL	0836-22-2217　FAX　0836-22-2321

分野の紹介

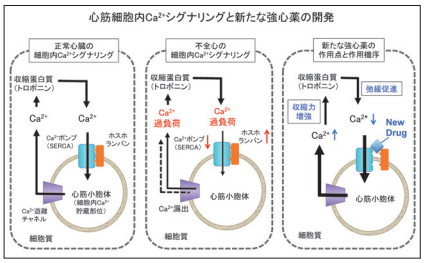
近年、生体機能を分子レベルで理解しようという試みがなされ、様々な細胞内情報伝達系や受容体、チャンネル、酵素等の機能蛋白質の構造や機能が明らかになってきています。当教室では、この様な物質的基盤に立脚して、生体機能やその破綻から生じる病態を理解し、適切な薬物治療ができるような科学的根拠を提供することを薬理学教育の目標にしています。また、研究面でも、生体機能を物質的基盤に立脚して解析すること、薬物の作用機序を解明すること、新たな薬物を開発することを目指しています。具体的には、当分野では、以下のような研究･開発を推進しています。

1）心臓を対象に、心臓機能を制御する細胞内Ca2+制御機構の研究を行い、これらに作用する新たな薬物の開発を行っています。特に、心筋細胞内Ca2+貯蔵部位のCa2+制御因子ホスホランバンは、当研究室で長年にわたり研究対象としてきた蛋白質です。このホスホランバンを標的として、極めて低濃度で効く具体的な薬物を新たな心不全治療薬として見出しています。

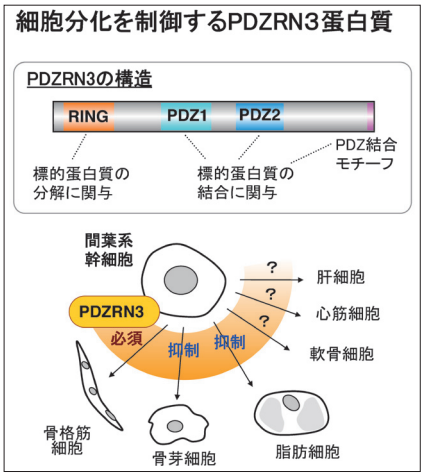
2）蛋白質のホメオスタシスや相互作用に重要な構造を持つ新たな蛋白質PDZRN3を当研究室で見出しました。この蛋白質が間葉系幹細胞に豊富に存在することから、骨格筋細胞、骨芽細胞、脂肪細胞などへの分化においてどの様な分子メカニズムで関わっているのかを解析しています。これらの解析は、将来の再生医療にも大きく寄与するものと期待されています。

3）眼科学の西田輝夫前教授との共同研究から、インスリン様成長因子?1（IGF-1）とサブスタンスP由来のそれぞれ4アミノ酸からなるペプチド合剤が創傷治癒促進薬となることを見出し、その作用機序を解明しています。IGF-1受容体を介するシグナルとは全く異なる新たなシグナル伝達系を介することを見出しています。現在この薬剤は、難治性角膜潰瘍の治療薬としての臨床試験が進行しています。

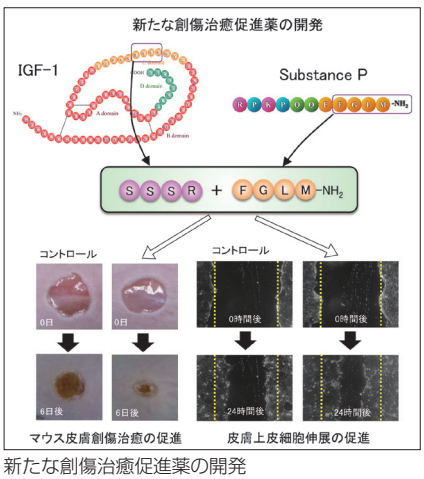
生体における情報の流れを把握し、これを生体に有利な方向、より適応力の大きい方向に人為的に改変する方法の研究が薬理学であり、新たな医療の先駆けとなるものです。熱意ある諸兄姉の参加を待ち望んでいます。



新たな強心薬の開発



新規蛋白質ＰＤＺＲＮ３の研究



新たな創傷治癒促進薬の開発

病理形態学分野（旧 病理学第一）
Pathology

HP http://ds22.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~pathol1/ ✉ pathol1@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日現在

教授名	池田 栄二
分野のメンバー	池田 栄二、崔 丹、木村 徳宏、石井 文彩
医学科担当科目	基礎病理学総論、臨床病理学 1、病理組織実習 1、基盤系特別専門講義、臨床実習、自己開発コース、修学論文チュートリアル、Open Science Club、SCEA/AMRA
居室	医学部本館 4 階
TEL	0836-22-2202 FAX 0836-22-2219

分野の紹介

研究

当分野では、下記の研究を行っています。

〔血管系の改築と疾患〕

成体の血管系は、組織特異的分化を示すことにより各々の組織の至適微小環境を維持していますが、種々の難治性疾患において血管系の改築（血管新生、血管透過性亢進など）が起こり、病態悪化に働いていることが知られています。当分野では、血管系の改築という側面から、種々の難治性疾患（腫瘍性疾患、循環障害性疾患、代謝性疾患など）の病態解析を行っています。

〔低酸素刺激に対する細胞反応機構〕

生物は、進化の過程において、従来は毒であった酸素をエネルギー源として利用し生存する機構とともに、細胞が低酸素状態にさらされた際にも生存するための代償性反応機構を獲得しました。これらの反応機構の解明が飛躍的に進み、hypoxia-inducible factor 1（HIF-1）pathway を中心とした極めて興味深い多くの知見が発表されました。それらの知見は、虚血性疾患のみならず腫瘍性疾患や代謝性疾患の病態とも共通するものであることが明らかにされ、現在、もっとも注目されている研究領域の一つとなっています。我々は、低酸素刺激に対する細胞反応について、新たな知見を求めて研究を進めています。

〔脳腫瘍（特に、グリオーマ）の発生機構および組織病理診断〕

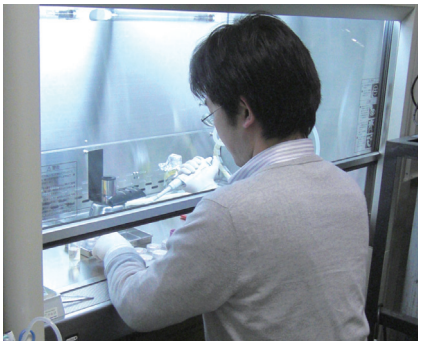
腫瘍幹細胞の概念を含めた多角的な側面からグリオーマの発生機構を解析し、得られた知見をもとに、グリオーマ患者の治療方針決定に直結した新たな病理診断手法を提唱すべく研究を進めています。

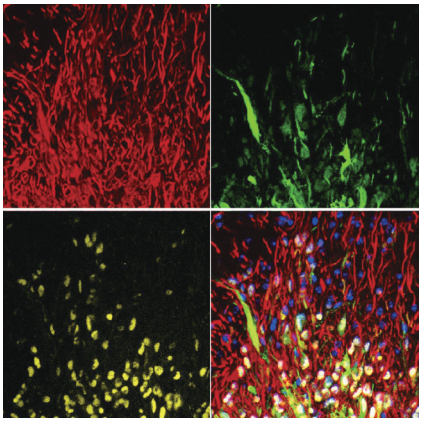
教育

「基礎病理学総論」「臨床病理学」「病理組織実習1」（医学部医学科2年）などの座学と、「臨床実習1」（医学部医学科5年生）による臨床病理業務実習を有機的に統合し、病理の全体像を俯瞰した卒前教育を実践しています。また、卒後教育に関しても、県内関連施設との連携も含め、病理専門医取得のための研修体制が整っています。

臨床病理業務

患者様から採取された生検検体（組織）、細胞診検体（細胞）、手術切除検体（組織）の肉眼的・組織学的観察を行い、疾患の病態についての最終診断を下す臨床病理業務を担当しています。また、不幸にして亡くなられた患者様のご遺体を解剖することにより、生前の診断・治療の妥当性を臨床担当医とともに議論し、医療の質の向上に貢献しています。


実験風景


多重染色による解析

臨床実習風景

分子病理学分野（旧 病理学第二）
Molecular Pathology

HP http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~26youri/index.html　pathol2@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日現在

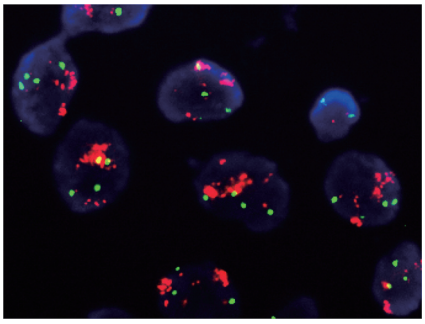
教授名	伊藤 浩史
分野のメンバー	伊藤 浩史、河内 茂人、小賀 厚徳、近藤 智子
医学科担当科目	基礎病理学総論、臨床病理学 2、病理組織実習 2、自己開発コース、修学論文テュートリアル、Open Science Club、SCEA/AMRA
居室	医学部本館 4 階
TEL	0836-22-2222　FAX　0836-22-2223

分野の紹介

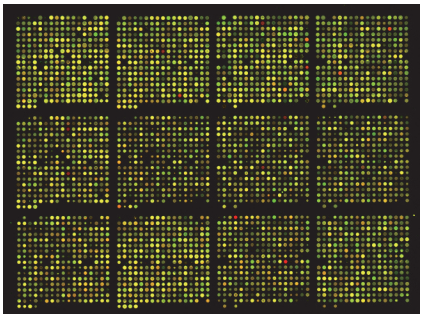
病理学は、基礎医学と臨床医学の架け橋となる学問と言われます。基礎医学としての病理学本来の目標は、疾病の本態を究明する学問です。したがって、疾病に対する正しい理解と真摯な興味を引き出すこと、確固たるエビデンスに基づいた医療の必要性を認識させることを教育目標としています。その上で、生体内で実際に観察される現象を対象とし、臨床応用を常に考慮した研究、および分子生物学の重要性を理解したうえで病理形態学に重点を置いた研究を目指しています。そのためには、形態学的変化を見逃さない確かな眼を養うこと、病理形態学に差がないが表現形に差があるときは分子生物学的なアプローチを行なうことが重要です。臨床医学としての病理学はまさに日常業務として病院で行われている、病理診断、病理解剖（剖検）であり、常に患者さんのことを考えながら迅速で正確な病理診断を行い、病理解剖では臨床医のさまざまな疑問に答えられなければなりません。

このように、病理学の範囲は基礎医学から臨床医学まで多岐に渡っており、いずれもレベルの高さを追求されています。当教室では、その意味でも橋渡し研究（Translational　Research）を重視し、基礎的であると同時に臨床応用可能な研究を行なっており、特に遺伝子レベルでの分子生物学的な手法を用いた新しい病理診断技術の開発に力を入れています。日々の病理診断、病理解剖は新たな発見の連続であり、さまざまな疾病の原因解明の糸口になり、新たな診断法、治療法開発につながると考えて研究を行なっています。

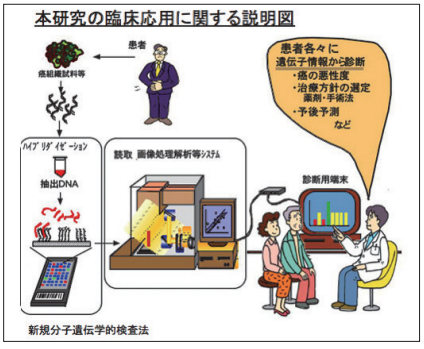
当教室では、研究を続けながら病理医として臨床に携わりたい方、逆に病理医として臨床に携わりながら少し研究もやってみたい方、いずれの方々も歓迎します。病理学の良い点は、研究職、医療職等の将来の選択肢が多く、また自由度が高い点であり、結婚、出産等を経ながらでも仕事を継続できます。病理医の絶対数は大きく不足しており（全国で約2,000名）、多くの病院で医療の質の評価の面からも病理医が求められています。学生さんの一部には、患者さんに向かい合えないと言って病理医を敬遠する傾向がありますが、最近では患者さんと向かい合う病理医も求められています。病理医は臓器横断的な幅広い知識を持っているので、いわゆる病理外来とともに遺伝相談等、将来的にはあらゆる病気のことを何でも相談できる病理医が求められるのではないでしょうか?



FISH法による染色体遺伝子解析



DNAマイクロアレイ法による遺伝子発現解析



当教室の研究概要

ゲノム・機能分子解析学分野（旧 微生物学）

Genomics and Infectional Proteomics

HP http://mb.med.yamaguchi-u.ac.jp/　　bisei@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日現在

教授名	白井 睦訓
分野のメンバー	白井 睦訓、長谷川 明洋、大津山 賢一郎、荻野 英賢
医学科担当科目	病原細菌学、自己開発コース、修学論文テュートリアル、Open Science Club, SCEA/AMRA
居室	医学部本館 3 階
TEL	0836-22-2227　FAX　0836-22-2415

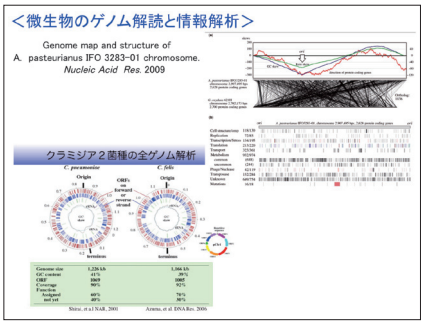
分野の紹介

エイズ、C型肝炎ウイルス、O157感染症、MRSA感染症などの新興感染症や結核、赤痢などの再興感染症は世界的規模で問題となっています。また、ピロリ菌による消化性潰瘍や肺炎クラミジアによる動脈硬化症など、従来微生物とは無関係と考えられていた疾患が、感染症として注目されてきました。感染症は明らかに変貌しており、それに対して適切な診断と治療、正しい予防指針の提示が求められています。

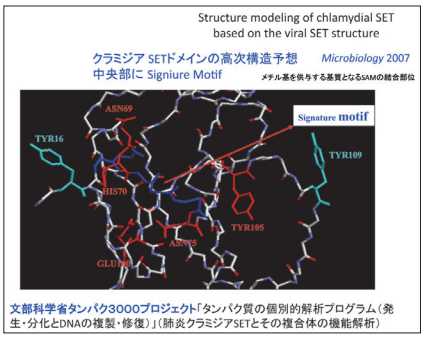
本分野では、病原微生物の病原性と感染機構、それら感染体に対する生体防禦を、主として分子遺伝学的手法を用いて研究しています。微生物ゲノムプロジェクトとして、細菌のゲノム配列決定やポストゲノム研究を行っています。また、感染症の発症を分子レベルで解明することを目指しており、これらの研究の成果を臨床へ応用することを目標として研究を進めています。他方、感染制御の観点から新規に作成した遺伝子改変マウスを利用した免疫系分化機構の研究も行っています。

診療の現場で、感染症は日常的に遭遇する疾患であり、感染症の専門的な知識が必要とされます。その中には、従来の知識では治療できないものもあります。病原微生物の基本的な取り扱い手法を身につけていれば、正しい診断と適切な治療を自ら見つけることができます。感染症の専門的な知識を身につけ、問題を解決する力を持った医師を育成することも本分野の重要な使命であると考えています。

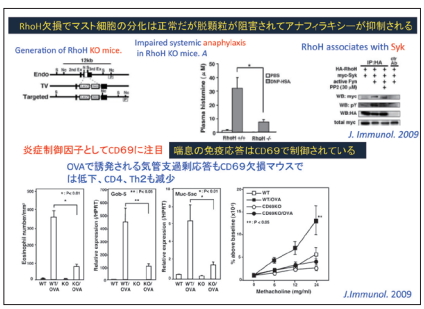
本分野の研究に興味をもち、微生物研究により新分野を切り開くことを志す諸君、感染症に正面から取り組むことを考えている諸君は、ふるって本分野の扉をたたいて下さい。



微生物のゲノム解読と情報解析



病原因子の構造解析



炎症免疫応答に重要な因子の解明

環境保健医学分野（旧 衛生学）
Hygiene

HP http://web.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~eisei/　　eisei@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日現在

教授名	原田 規章
分野のメンバー	原田 規章、HOSSAIN MD.MAHBUB、長谷 亮佑
医学科担当科目	医学入門 1、医用統計学、環境・予防医学、衛生統計・保健医療学、生活習慣病・疫学・地域医療、社会医学基本実習、社会医学課題実習、基盤系特別専門講義、自己開発コース、修学論文テュートリアル、Open Science Club、SCEA/AMRA
居室	基礎研究棟 5 階
TEL	0836-22-2229　FAX　0836-22-2345

分野の紹介

広い意味での環境との関連で人間の健康を考える学問が衛生学です。生活環境や職場環境を改善することによって、多くの疾患の発生を予防できます。現代の医学の進歩は著しく、分子レベルで疾患の本態が解明されつつあり、疾患の診断技術は飛躍的に進歩しています。しかし、発達した医学により診断はつくけれども、本当に有効な治療はまだまだ十分でないことも事実です。

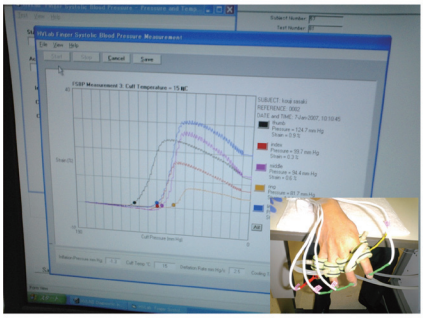
国民が健康な生活をおくるためには、発病する前の予防が最も大切であるということは現在でも変わりありません。疾患の予防のためには、疾患の発生を規定するさまざまな危険因子とその改善方法についての研究が必要です。また、人々がその生活の場で疾患の予防や早期診断のために適切な健康管理を受けたり、不幸にして罹患した場合に適切な医療措置を受けるために必要な保健・医療・福祉のあり方も私たちの研究課題です。

このように衛生学の研究対象は多彩です。また、社会の変化とともに疾病やその危険因子も変化し、保健・医療・福祉システムも時代に適合したものが求められます。衛生学の研究課題は、時代とともに変化してきています。その中で、私たちの教室では、特に騒音や振動などの物理的環境要因の生体影響の研究、そのほかの有害物質の生体影響や地域の疾病・死亡構造の疫学的研究、地域における保健、医療のあり方の研究を主要な研究課題としています。

衛生学は、純粋の基礎医学と違い、人間を対象とする社会医学ですから、臨床的な知識が必要です。また、医学以外の分野との学際的な内容を持つ領域ですので、広い科学的な知識と力量を必要とします。時代とともに変化する衛生学の課題に、教室員一同それぞれの問題意識を明確にしながら努力を積み重ねています。

衛生学に関心をもち、私たちとともに頑張ってくれる若い学生が教室に参加してくれることを期待しています。

伐木作業と振動起因性白指


冷却負荷手指血圧測定

社会医学課題実習

環境統御健康医学分野（旧 公衆衛生学）
Public Health

HP http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~kouei/　　kouei@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日現在

教授名	田邉 剛
分野のメンバー	田邉 剛、奥田 昌之、髙橋 秀和、山口 奈津
医学科担当科目	医用統計学、環境・予防医学、衛生統計・保健医療学、生活習慣病・疫学・地域医療、社会医学基本実習、社会医学課題実習、実践臨床医学特論、自己開発コース、修学論文チュートリアル、Open Science Club、SCEA/AMRA
居室	基礎研究棟５階
TEL	0836-22-2231　FAX　0836-22-2323

分野の紹介

公衆衛生は、「組織された地域社会の努力を通して、疾病を予防し、寿命を伸展し、身体、精神機能の増進をはかる研究分野である」と定義され、非常に多岐にわたるものです。

近年、日本では高齢化が急速に進み、疾病構造も大きく変化しています。このため、公衆衛生学の教育・研究・社会活動における重要な課題の一つは、生活習慣病対策と考えています。

現在、生活習慣病対策として二つのテーマを進めています。一つは血中アミノ酸の濃度が種々の疾患で特有のパターンを示すことから、これを指標とした疾患のスクリーニング法の開発です。これまで悪性腫瘍（胃癌、肺癌、大腸癌、前立腺癌、乳癌）、肝線維症などの診断への有用性が明らかになっています。この手法の早期診断への適応を目指して、約一万人を対象とし、疾病発症との関連を解析するコホート研究をすすめています。

もうひとつのテーマは、生活習慣病発症の分子機序の解析です。近年、自然免疫系の異常による炎症が、動脈硬化や耐糖能異常などの生活習慣病をもたらすことが明らかになっています。現在、リスク判定に有用なマーカーを同定するため、自然免疫因子の遺伝子多型やエピジェネティクスと臨床経過の関連を解析しています。また、自然免疫系の活性制御システムの構築を進めています。従来と異なる視点からの高リスク群の同定と発症予防、治療応答性や予後の予測を実現させたいと考えています。

【専門分野】　公衆衛生学分野

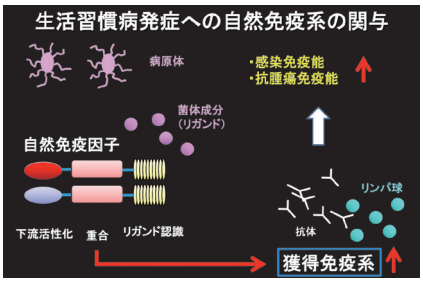
生活習慣病の克服を目的として、疫学的研究、実験的研究を進めています。血中アミノ酸をバイオマーカーとした生活習慣病の早期診断法の開発を行っています。さらに、自然免疫系の解析により生活習慣病発症の分子機構を明らかにし、新規予防法開発を目的としています。

【主な研究内容】

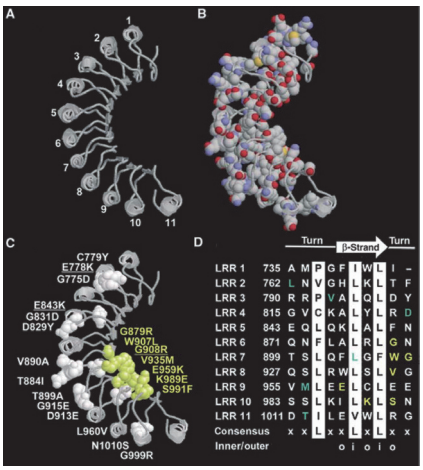
・生活習慣病の早期診断法の開発　・自然免疫系の異常と生活習慣病の発症
・在宅介護問題　・高齢者の医療

【応用分野】

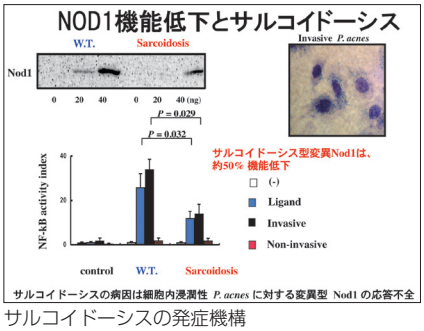
・生活習慣病の新規予防法開発　・高齢者介護



生活習慣病発症への自然免疫系の関与



自然免疫因子NOD2の遺伝子変異解析



サルコイドーシスの発症機構

法医・生体侵襲解析医学分野（旧 法医学）
Legal Medicine

HP http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~legal/　　legal@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日現在

教授名	藤宮 龍也
分野のメンバー	藤宮 龍也、高瀬 泉、劉 金耀、白鳥 彩子
医学科担当科目	医学入門 1・2、医学英語 1・2、医療安全学、医療安全チュートリアル、臨床倫理チュートリアル、法医学、重点統合 1、自己開発コース、修学論文チュートリアル、Open Science Club、SCEA/AMRA
居室	医学部本館 5 階
TEL / FAX	0836-22-2234 / 0836-22-2232

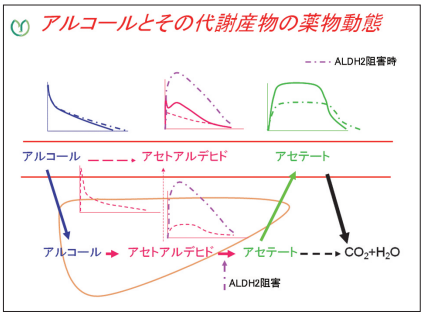
分野の紹介

社会的・司法的諸問題について、医学的手法の応用を目指す学問が法医学であり、中でも、病理学や中毒学の視点から取り組むのが法医病理学・法医中毒学です。法医学実務において、異状死体の死因を決定することが大きな比重を占めています。全死亡の約15%を占める異状死体とは、確実に臨床診断された内因性疾患で死亡したことが明確である死体以外の全ての死体をいい、突然死・不慮の事故死・自殺・他殺等が含まれます。近年は無差別殺人・保険金殺人(中毒死)など都市型殺人が増え、困難な事例に多く遭遇するようになりました。過労のようなストレスが突然死に重要な影響を持つことから、過労死といった複雑な事例も問題となっています。また、単純な技術過誤による医療事故ばかりでなく、患者・遺族の権利意識の変化と医学知識の普及により、説明義務違反などの医療紛争が増え、法医鑑定が求められることも増えてきました。先端医療や民事事例などについて法医学の役割は重要です。このような社会的要請により、法医学の扱う対象は広くなってきていますが、その多くが鑑定に結実されます。よって、鑑定の科学性の追求が法医学の基本テーマです。

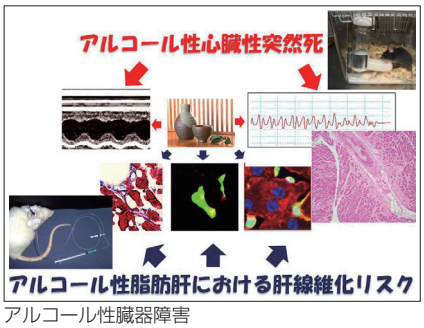
当分野では、生体への侵襲要因のうち、外因と突然死を起こす要因の病理学的検討とその背景の社会医学的研究を行っています。小児虐待・老人虐待・自殺・医療事故・刑事事件など、今日的問題が法医解剖には反映されます。また、小児虐待や性暴力等の生体の損傷鑑定においても、犯罪予防を行い社会安全を追求する臨床法医学の研究を行っています。事例検討を通じて、社会への貢献を目指しています。

法医中毒学では、薬毒物の同定・評価が鑑定の重要な事項ですが、薬毒物の評価の視点から、薬物動態学や中毒作用について研究を行っています。特に、アルコールの薬物動態学では世界をリードする研究を目指しています。アルコールとその代謝産物であるアセトアルデヒド・酢酸の動態とその細胞・組織毒性についてや、心臓や肝臓へのアルコール性障害について研究し、鑑定の役に立つよう研究に取り組んでいます。

法医解剖風景　性暴力救援センター（大阪）



アルコールの体内動態

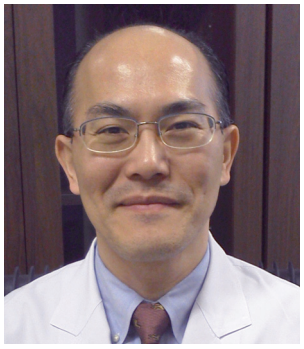


アルコール性臓器障害

免疫学分野（旧 寄生体学）
Immunology

HP http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~plasma/　✉ immunol@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日現在

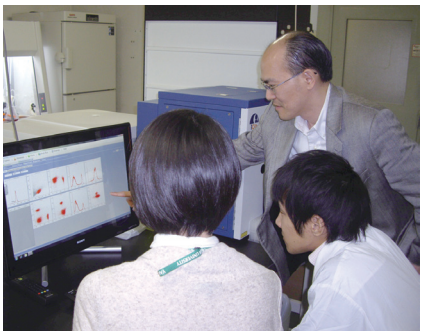


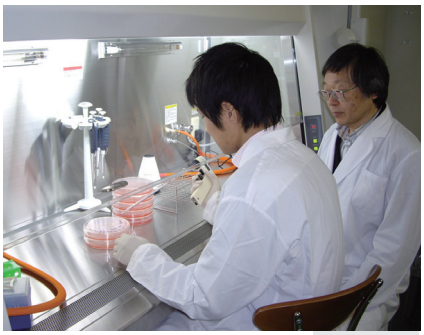
教授名	玉田 耕治
分野のメンバー	玉田 耕治、佐古田 幸美、安達 圭志
医学科担当科目	血液・免疫学、ウイルス医動物学、病原生物学実習、自己開発コース、修学論文テュートリアル、Open Science Club、SCEA/AMRA
居室	医学部本館 3 階
TEL	0836-22-2236　FAX　0836-22-2237

分野の紹介

免疫システムは、多様な機能を有する細胞群が、時間的・空間的相互作用を介して極めて効率的に生体防御機能を発現する一方で、非反応時にはシステム全体としての恒常性・安定性が維持されるよう制御されています。免疫機能の低下は病原体排除の障害による感染症を引き起こし、免疫恒常性の破綻は自己免疫疾患の病因となります。免疫システムの適切なコントロールは様々な機能性蛋白、例えば細胞外に分泌される可溶性蛋白、細胞膜に発現される膜型蛋白、細胞質内や核内に存在するシグナル伝達蛋白などに依存しています。よって免疫疾患に対する治療法開発を目指した研究においては、これらの機能性蛋白を同定し、その働きを解明することがもっとも重要かつ直接的な研究戦略です。我々のグループは、免疫系機能性蛋白の中でも特に共シグナル分子群とよばれる細胞膜蛋白に焦点を絞り、そのクローニングと機能解析をするとともに、免疫関連疾患における役割を明らかにしています。さらに、共シグナル分子の機能を制御することにより、癌や自己免疫、移植に伴う免疫反応などに対する新規免疫療法を開発しています。

さらに我々は、基礎研究の世紀を臨床応用するためのトランスレーショナル研究を積極的にすすめています。臨床研究グループとの密接な共同研究、またバイオベンチャーや製薬企業を含めたライフサイエンス企業との提携を推進し、我々の基礎研究での知見を効率的に臨床現場に還元することを目指しています。患者さんの検体を用いて、新しい癌免疫療法の前臨床試験や免疫系バイオマーカーの検索などを行い、癌を含めた難治性疾患に対する効果的な免疫療法を開発することで、我々の研究成果を世界に向けて発信することを目標としています。


フローサイトメリーによる細胞解析


細胞培養実験

液体窒素での細胞凍結保存

消化器病態内科学分野（旧 内科学第一）

Gastroenterology and Hepatology

HP http://www.ichinai-yamaguchi.jp/　　naika1_w@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日現在

教授名	坂井田 功
分野のメンバー	坂井田 功、寺井 崇二、泉 友則、西川 潤、戒能 聖治、岡本 健志、瀬川 誠、山本 直樹、高見 太郎、橋本 真一、石川 剛、日髙 勲、丸本 芳雄、松本 俊彦、岩本 拓也、佐伯 一成、藤澤 浩一
医学科担当科目	消化器病態系、漢方医学、自己開発コース、修学論文チュートリアル、AMRA、臨床実習
付属病院診療科	第 1 内科
居室	臨床研究棟 5 階
TEL	0836-22-2243　FAX　0836-22-2240

分野の紹介

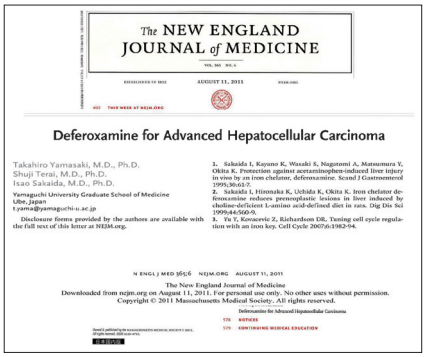
担当する専門分野は消化器内科学であり、消化器病学、肝臓病学、胆道膵臓病学(消化、吸収、代謝の制御、ウイルス学)、内視鏡学(光学医療診療部)、腫瘍学、漢方医学、再生医学と多岐にわたります。現在、消化管班、肝臓班、胆膵班、化学療法班での専門的な診療に加え、Team MetS(Metabolic Syndrome)やNST(栄養治療チーム)としてグループを超えて連携し、臨床、研究、教育活動を行っています。

近年の消化器内科領域での技術革新は目覚ましく、当教室では、カプセル内視鏡、小腸ダブルバルーン内視鏡の導入により、全消化管(食道、胃、小腸、大腸)の内視鏡検査が可能になりました。また、早期胃癌、食道癌に対する内視鏡的粘膜剥離術、胆膵疾患に対する超音波内視鏡検査を使った生検検査や減黄術、肝癌に対する経カテーテル治療や超音波装置を駆使したラジオ波焼灼療法、血管造影検査を応用した食道･胃静脈瘤治療、脾臓塞栓療法などの先進的な治療を行っています。その環境の中で県内外の地域医療現場で安全で高い医療技術をもち、幅広く診療ができる医師を目指しています。さらに、2009年9月より、山口大学医学部附属病院が肝炎対策拠点病院(肝疾患センター設立)に指定され、教室では厚生労働省肝炎対策室との人事交流も行っています。また、肥満症専門病院(日本肥満学会認定)の基幹科として、平成23年1月より認定をうけて活動しています。

研究面においては、臨床への橋渡し研究(Translational Research)を行うために、東京大学を始めとし、米国のNIH、イギリスのロンドン大学Imperial College、韓国延世大学との連携で研究を進めており、基礎研究のみでなく多施設共同臨床研究も行っています。その成果の一つとして、肝硬変症に対する自己骨髄細胞投与療法(ABMi療法)を世界に先駆けて開発し、これについては2008年6月、NHKのクローズアップ現代で世界の肝硬変治療をリードする教室として紹介されました。海外の研究者、医師もこの治療法に興味を持ち、現在までにブラジル、エジプト、インド、韓国、ロシアからの研究者が来日し、当教室でさらに低侵襲治療の開発研究を行っています(国家基幹研究開発推進･再生医療の実現化プロジェクト文部科学省)。2011年8月、新規肝癌治療法の鉄キレート剤治療(i-MM治療)が、“The New England Journal of Medicine”にも掲載されました。

肝硬変症に対する自己骨髄細胞投与療法施行時

細胞プロセッシング(再生細胞療法センター)



進行肝癌に対する鉄キレート剤治療
“The New England Journal of Medicine”掲載

教室は、“教室員全員がそれぞれに夢をもち、それを実現できるような体制を作りたい”を目的に、それぞれの個性と協調を発揮するオーケストラのような教室を作ることを目標に運営しています。いい音色を作る中で、“山口県はもとより県外の大学、研究機関、病院、地域医療のリーダーを輩出できる教室にしたい”と、教室員も皆頑張っています。

器官病態内科学分野（旧 内科学第二）

Medicine and Clinical Science

HP http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~ninai/　　ninai@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日現在

教授名	矢野 雅文
分野のメンバー	矢野 雅文、清水 昭彦、梅本 誠治、山本 健、小林 茂樹、中村 浩士、和田 靖明、上山 剛、岡村 誉之、山田 寿太郎、久保 誠、吉賀 康裕、池上 直慶、名尾 朋子、奥田 真一、白上 巧作、小田 哲郎
医学科担当科目	環器病態系、呼吸器病態系、自己開発コース、修学論文テュートリアル、AMRA、臨床実習
付属病院診療科	第２内科
居室	臨床研究棟４階
TEL	0836-22-2248　FAX　0836-22-2246

分野の紹介

当分野では、循環器病学、腎臓病学、呼吸器病学、リウマチ膠原病学の4部門にわたる広い範囲をカバーし、臨床、研究、教育を行っています。

臨床においては、24時間体制で急患や重症患者を受け入れ最先端の治療を行っています。たとえば、循環器領域では急性心筋梗塞患者に対しては急性期に冠動脈造影、冠動脈形成術、ステント留置術を行っています。さらに血管内超音波検査やOCTを用いた血管内画像診断、ロータブレーターを用いた最先端の治療を行っています。

不整脈治療においては、カテーテルアブレーションを用いた重症な不整脈の根治療法を行っています。特に心内マッピングシステムを用いた難治性不整脈治療を行っています。心房細動のアブレーションによる治療も多数施行しています。致死的不整脈に対して、植え込み型除細動器による治療を実施しています。重症心不全の治療においては、両心室ペーシング療法、補助人工心臓の使用、さらに心臓移植の適応判定、移植施設への紹介を行っています。

研究においては、循環器領域の未解決な問題点を明らかにし、臨床への応用を目指した研究を行っています。たとえば、心不全においては心筋内カルシウム制御の観点から新たな心不全の治療標的を探索する研究を行っています。臨床的研究として心エコーによる新たな心機能評価法の開発や血管内エコー法やOCT、血管内視鏡による動脈硬化の進展機序の解明が注目されています。最近、Dual Source MDCTを用いた非侵襲的冠動脈のプラーク診断に関する研究を行っています。腎臓病領域では、すべての腎疾患の診断と治療、および透析療法を手がけています。腎臓バイオプシー検査による正確な診断と免疫抑制薬等を用いた薬物治療を得意としています。

呼吸器領域では、肺炎などの診断と治療を行っています。細菌性肺炎や気管支喘息をはじめとしたポピュラーな疾患から、重症の呼吸不全、間質性肺炎の治療を手がけています。

リウマチ膠原病の領域では、関節リウマチやSLEをはじめとするすべての自己免疫疾患の診断と治療を行っています。特に免疫抑制薬を用いた治療を得意としています。

冠動脈インターベンション

集合写真

症例カンファレンスの風景

国内留学や海外留学も積極的に行って、最新の研究を行っています。アメリカ、ヨーロッパへ常時数人が留学し、国際的な研究交流を行っています。

病態制御内科学分野（旧 内科学第三）

Endocrinology, Metabolism, Hematological Sciences and Therapeutics

HP http://sannaika.med.yamaguchi-u.ac.jp/　　sannai@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日現在

教授名	谷澤 幸生
分野のメンバー	谷澤 幸生、湯尻 俊昭、太田 康晴、藤井 康彦、竹田 孔明、田部 勝也、中邑 幸伸、福田 尚文、田口 昭彦、宮崎 睦子、田中 芳紀、秋山 優
医学科担当科目	内分泌系、遺伝子病態学、病態免疫・感染症医学、血液・リンパ・造血器病態系、内分泌・栄養・代謝病態系、臨床系特別専門講義、自己開発コース、修学論文テュートリアル、AMRA、臨床実習
付属病院診療科	第３内科
居室	臨床研究棟５階
TEL / FAX	0836-22-2252 / 0836-22-2342

分野の紹介

臨床面では、附属病院第三内科、糖尿病・内分泌内科、血液内科、膠原病感染症内科を担当し、内分泌・代謝疾患、血液疾患、感染症、膠原病を主たる診療対象としています。

内分泌・代謝疾患の中では、糖尿病が全体の約9割を占め、臨床面の中心をなします。現在、本邦に於ける糖尿病患者数は約890万人と言われており、今後ますます増加することが予想されています。糖尿病はさまざまな合併症により健康寿命を短縮させる最も重要な生活習慣病のひとつです。複雑な病態を呈する糖尿病の合併症を管理・予防するため、専門性の高い治療が求められます。看護師、栄養士、薬剤師などコメディカルスタッフとのチーム医療により、質の高い診療を行っています。さらに、日本糖尿病学会、日本内分泌学会の認定教育施設としてこれまで多くの専門医を輩出し、県内の糖尿病や内分泌疾患診療の質の向上に努めています。

血液疾患の診療では、クリーンルームを7床有し、造血幹細胞移植や分子標的薬を用いた最先端治療を行っています。とりわけ造血幹細胞移植に関しては、西日本において草分け的な存在であり、当科では造血幹細胞移植に関する技術の開発、改良と基礎的研究も合わせて行っています。今まで不治の病といわれた白血病などの治療も、日進月歩で進歩しています。そうした治療をいち早く取り入れ、患者さんに最大限の恩恵が受けられるよう努力すると共に、日本血液学会血液研修施設として優秀な血液専門医も育成し輩出しています。

すぐれた臨床は、優れた研究により裏打ちされます。研究成果を世界に向けて発信し、高い評価を得てきました。研究面では、日常診療で取り扱う疾患を分子のレベルに掘り下げて理解し、治療法、予防法を確立することを目指しています。米国の研究室との共同研究として糖尿病と視神経萎縮を合併するWolfram症候群の原因遺伝子(WFS１)を世界に先駆けて同定したことも教室の特筆すべき業績の一つです。WFS１の機能を調べることで糖尿病を進行させるβ細胞死のメカニズム解明を進めています。さらに、糖尿病発症の要因の一つであるインスリン抵抗性についても新たな分子メカニズムを解明し、報告しています。血液の分野では、白血病の発症メカニズム、シグナル伝達についての基礎研究、末梢血幹細胞動員方法の改良や全国の主要施設と共同して新たな治療法を確立する臨床研究にも参加しています。

このように、病気のメカニズムを一つ一つ紐解く中で、「山口から世界へ発信」を合言葉に、各々が成果を積み上げています。幅広い視野を持ち、世界に通じる研究を展開するため、国内外の一流研究施設への留学生の派遣も積極的に行っています。

大学の使命である教育・臨床・研究の3本柱を強力に推進することにより、患者さんに、地域社会に、そして世界に貢献することを目標に、日々精進しています。

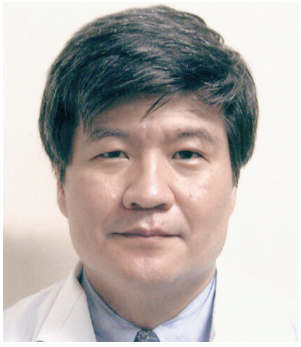
病棟カンファレンス

実験中の大学院生

教授回診

神経内科学分野（旧 神経内科学）
Neurology

HP http://www.neurol.med.yamaguchi-u.ac.jp/ ✉ neuro@yamaguchi-u.ac.jp



平成26年5月1日現在

教授名	神田 隆
分野のメンバー	神田 隆、川井 元晴、古賀 道明、小笠原 淳一、佐野 泰照、尾本 雅俊、清水 文崇、安部 真彰
医学科担当科目	神経病態系、自己開発コース、修学論文テュートリアル、AMRA、臨床実習
付属病院診療科	神経内科
居室	臨床研究棟 1 階
TEL	0836-22-2719
FAX	0836-22-2364

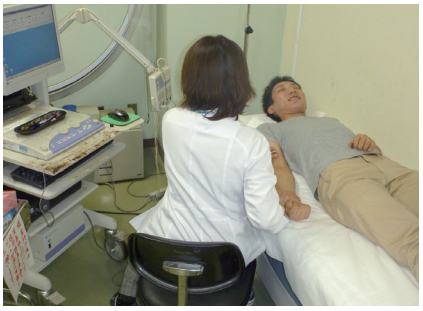
分野の紹介

当分野は、日本では内科の一分野として認識されていますが、欧米ではNeurology(神経科)という名称の独立したdepartmentであり、中枢神経系、末梢神経系、筋肉の疾患を扱う非常に間口の広い分野です。厚生労働省は、特定疾患として56種類の難病を公費補助の対象としていますが、このうち実に16は神経内科疾患であり、また、神経症状をあらわして神経内科が関与する疾患も半数以上に及びます。また、このような難病だけでなく、単一臓器の疾患としては、日本人の死因のトップとなる脳血管障害もわれわれが扱う重要な疾病のひとつです。これらの幅広い疾患群を対象として、研究・診断・薬物治療・リハビリテーションを含めた総合的な研究・診療にあたるのが神経内科学の仕事です。

主な研究・診療の対象は、上記の脳血管障害のほか、中枢神経系変性疾患(アルツハイマー病、パーキンソン病、筋萎縮性側索硬化症など)、脱髄疾患(多発性硬化症など)、神経感染症(髄膜炎、プリオン病など)、脊髄疾患、末梢神経疾患(ギランバレー症候群など)、筋疾患(筋ジストロフィー症、重症筋無力症、多発筋炎・皮膚筋炎など)などですが、これらに加えて、てんかん、頭痛、めまいなどの非常に患者さんの数の多い"common disease"も神経内科の守備範囲です。

社会のニーズに比べ、神経内科の専門医の数は絶対的に不足しており、また、将来的に神経関係のbasicな研究者としての道を選ぶことも可能で、専門家として長い期間第一線で仕事をするには極めて条件の整った科であるといえます。19世紀のある時期がコッホやパスツールの名前とともに、細菌学の時代として記憶されたのと同じように、21世紀初頭は脳の時代として後世に記憶されることになることは間違いなく確実です。来るべき時代に神経内科のコッホやパスツールとして、神経学の担い手となる若い諸君の参加を切望します。

外来診察の様子


診察の様子

回診の様子

高次脳機能病態学分野（旧 神経精神医学）
Neuropsychiatry

HP http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~mental/　✉ seisin@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日現在

教授名	渡邉 義文
分野のメンバー	渡邉 義文、松尾 幸治、松原 敏郎、内田 周作、山形 弘隆、綿貫 俊夫、芳原 輝之、橋本 亜希子、樋口 文宏、河上屋 史織
医学科担当科目	高次脳病態系、加齢・老年病態系、自己開発コース、修学論文テュートリアル、AMRA、臨床実習
付属病院診療科	精神科神経科
居室	臨床研究棟９階
TEL	0836-22-2255　FAX　0836-22-2253

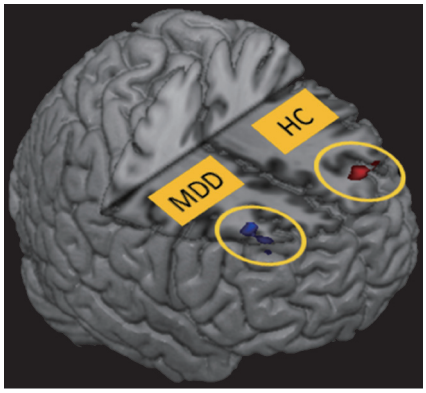
分野の紹介

当分野における臨床での研究的取り組みとしては、1)うつ病における内分泌的検索や神経画像研究、2)うつ病患者を対象とした遺伝子研究、3)統合失調症の神経画像研究に力点を置いています。このような臨床研究を通して、神経内分泌、神経画像、神経免疫など神経科学的基礎知識を身につけるとともに、精神薬理学に精通し、科学的思考に基づいた治療計画が立てられる精神科医の養成を目指しています。患者の気持ちを理解し、医師ー患者間の信頼関係を適切に築けることも精神科医にとっては必須であり、当科の目指す精神科医像は豊かな人間性・共感性と科学的思考を兼ね備えたバランスのとれた医師のことです。

また、臨床研究とともに、神経科学的基礎研究を重視しています。近年、分子生物学の進歩に触発されて長足の進歩を遂げている神経科学研究の成果を取り込み、分子生物学的手法を積極的に取り入れ、遺伝子ー神経細胞ー行動と統合的研究を押し進めています。主な対象疾患は感情障害(うつ病)です。うつ病については、患者を対象とした遺伝子研究も行っています。

教室のモットーとして、民主的ディスカッションの重視、外部関連機関・施設との有機的連携(開かれた教室)を掲げています。

病棟スタッフ



脳画像研究

分子生物学研究

小児科学分野（旧 小児科学）
Pediatrics

HP http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~pediat/　　shouni@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日現在

教授名	大賀 正一
分野のメンバー	大賀 正一、長谷川 俊史、前場 進治、松重 武志、鈴木 康夫、梶本 まどか、水谷 誠、脇 和之、福田 謙、工藤 敬子、井上 裕文、橘髙 節明、岡田 清吾、下村 麻衣子
医学科担当科目	呼吸器病態系、膠原病・アレルギー病態系、胎生・周産期病態系、小児発達病態系、臨床系特別専門講義、実践臨床医学特論、自己開発コース、修学論文テュートリアル、AMRA、臨床実習
付属病院診療科	小児科
居室	臨床研究棟 6 階
TEL	0836-22-2258　FAX　0836-22-2257

分野の紹介

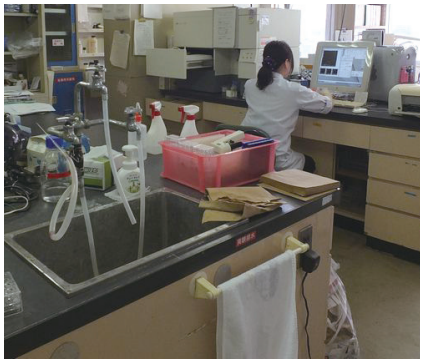
当分野のモットーは、「病める子供の心を理解できる良医たれ、同時に大局観を備えた研究者たれ」であり、すぐれた臨床小児科医の育成を目指しています。小児科の対象は、新生児から思春期まであります。各診療科が細分化し、専門化しつつある現状でも、子供に関する診療は小児科医が一手に背負っており、かつ遭遇する病気が年齢によって異なるので、医師として幅広い知識が必要です。また、母親と接触する機会が多いことから、子供の教育、心理面での相談を受けることがあります。

診療においては、スタッフはすべて一般小児疾患を診療していますが、さらに各分野の専門診療も行っています。各分野の診療については、それぞれの専門施設等での研修を終了した上で専門外来および重症の入院患児の治療にあたっています。末梢血の免疫担当細胞の機能解析、サイトカイン解析、超音波検査、電気生理検査（脳波、各種誘発電位、末梢神経伝導速度など）、呼吸機能検査、筋生検、腎生検などの検査を随時施行しています。また、血液・悪性疾患に対する骨髄移植、新生児低酸素性虚血性脳症や急性脳炎/脳症に対する脳低温療法、川崎病などに対する血漿交換療法、新生児でのNO吸入療法などの特殊治療を行っています。小児の疾患は広範囲ですので、専門分野に偏ることなく総合的に治療することが重要で、1つの疾患にとらわれずに患児1人をスタッフ全員できめ細かく診療することが大切と考えています。さらに、患児とご家族へのメンタルケアにも配慮できる丁寧な診療を心がけています。

研究においては、臨床あっての研究を軸にしております。小児科は幅広い領域をカバーしており、多くの専門分野がありますが、中でも病態に炎症が関わる疾患は，小児患者全体の約9割とも言われています。最も多いのが感染症であり，アレルギー疾患が続きます。その他自己免疫疾患や川崎病など多くの疾患が含まれます。

当教室では、「小児炎症性疾患の病態解析とその制御」をメインテーマに、臨床及び基礎研究を行っております。具体的な研究テーマは、各専門分野グループが独創性を持って追求し、他大学と共同研究も行い、世界に通用する研究を目指しております。

カンファレンス


実験風景

医局会の1コマ

器官病態外科学分野（旧 外科学第一）

Surgery and Clinical Science

HP http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~surg-1/　✉ surg-1@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日現在

教授名	濱野 公一
分野のメンバー	濱野 公一、榎 忠彦、美甘 章仁、白澤 文吾、森景 則保，上田 和弘、桂 春作、林 雅太郎、髙橋 雅弥、原田 栄二郎、村上 雅憲、鈴木 亮、岡 一斉、竹本 圭宏、末廣 晃太郎、藏澄 宏之、西本 新、細山 徹、上野 耕司
医学科担当科目	消化器病態系、循環器病態系、呼吸器病態系、自己開発コース、修学論文テュートリアル、AMRA、臨床実習
付属病院診療科	第 1 外科
居室	臨床研究棟 2 階
TEL / FAX	0836-22-2260 / 0836-22-2423

分野の紹介

当分野は昭和20年に開講し、平成14年より5代目の濱野公一教授が主宰しています。平成18年の大学院大学への組織移行に伴い、第一外科も、応用医工学系器官病態外科学へと改変されています。現在、医局員は97名であり、学内に29名、学外の関連病院に68名が勤務しています。

当科では、「優れた臨床外科医を養成することを主眼とするとともに、社会人としても常識を備えた全人的教育」を教室開講以来のモットーとしています。医療体系があまりにも細分化された結果、専門分野間のギャップが社会問題化し、プライマリ・ケアの重要性が声高に叫ばれています。このような現況において、当科は、外科学臨床の全てを幸いなことに網羅しており、「プライマリ・ケアから専門分野へと一貫した臨床外科医養成の場」として、絶好の環境を備えているものと自負しております。

学内の診療体制は、濱野教授の下、准教授4人、講師2人、助教12人のスタッフを中心に、臓器別にグループ体制をとっており、患者さんにはその疾患の専門医が中心となって診療にあたっています。平成25年度の入院患者数は1,188名、手術数は819症例です。高度先進医療としては、全国に先駆けて当科で臨床応用を始めた「骨髄細胞移植による血管新生療法」を行っており、全国各地から患者が来院しております。その他、TAVI（経カテーテル大動脈弁留置術）の実施施設に認定されています。胸・腹部大動脈瘤に対するステントグラフト内挿術も、本邦におけるパイオニア的な施設となっています。

病院業務はもとより、研究活動も活発に行っております。当科の特徴として、臨床講座でありながら基礎研究を主に行う研究班を設け、専属のスタッフを配置していることです。現在、13件の科学研究費受託研究が進行中であり、その他にも、大動脈瘤に対する遺伝子治療、消化器癌における抗癌剤感受性試験、肺切除後残存肺機能の予測など、臨床に直にフィードバックできる研究を中心に行っております。さらに、競争的外部資金の獲得にも奔走し、まずまずの外部資金を獲得しています。

教授回診

症例検討会

外科手術

消化器・腫瘍外科学分野（旧 外科学第二）

Digestive Surgery and Surgical Oncology

HP http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~surg2/　　2geka-2@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日現在

教授名	
分野のメンバー	硲 彰一、吉野 茂文、山本 滋、上野 富雄、飯塚 徳男、武田 茂、爲佐 卓夫、吉村 清、鈴木 伸明、坂本 和彦、飯田 通久、徳久 善弘，恒富 亮一、西山 光郎、前田 和成、藤本 拓也
医学科担当科目	臨床医学序説、臨床腫瘍学、消化器病態系、内分泌・栄養・代謝病態系、臨床系特別専門講義、自己開発コース、修学論文チュートリアル、AMRA、臨床実習
付属病院診療科	第２外科
居室	臨床研究棟２階
TEL	0836-22-2264　FAX　0836-22-2263

分野の紹介

当分野は、消化器外科および内分泌外科を担当しています。消化器外科では、食道・胃・小腸・大腸・直腸・肛門までの消化管領域と、肝臓・胆道・膵臓・脾臓などの肝胆膵領域と、全ての消化器外科領域の良性・悪性疾患を網羅し、我が国でもトップクラスの診療内容と治療成績を誇っています。内分泌外科では、乳腺疾患は山口県で最も症例数が多く、甲状腺・副甲状腺疾患の治療も行っています。一方、生命に危険が及ぶような重症急患はもとより、入院／手術が必要となるような急患も積極的に受け入れ、ヘルニアなどの一般外科診療も行っています。

近年の鏡視下手術の技術革新は目覚ましく、当教室でも積極的に取り入れ、多くの患者さんに“体に優しい高度な手術”を行っています。良性疾患のみならず、ほとんどの早期食道癌、胃癌、大腸癌には鏡視下手術が可能です。また、日本肝胆膵外科学会の高度技能専門医／高度技能指導医修練施設（A）として、山口県で唯一の認定を受けています。乳癌では放射線科と共同開発した3DCTリンフォグラフィを用いた正確なセンチネルリンパ節生検などを駆使して、乳房温存療法など整容的にも満足できる手術を実践しています。これらは全て専門的な技術と知識を持った学会専門医／指導医が対応しています。

当教室は、手術だけでなく、多くの患者さんに化学療法（抗癌剤や分子標的剤を用いた治療）を行い、最新の癌免疫治療も提供しています。術後再発や手術不能の患者さんにも同様の治療を行っています。中でも、先進医療として認められている活性化リンパ球療法や、臨床研究としてHSP70mRNA導入樹状細胞療法、個別化医療である遺伝子診断による抗癌剤治療選択、特許化した吻合補助器を用いた手術など、他の施設では受けられない診断や治療を行っています。研究は常に臨床に直結したテーマを取り上げ、癌免疫、癌遺伝子、網羅的遺伝子発現解析、プロテオーム解析、再生医療といった幅広い領域で行っています。癌に関しては、個別化医療の確立に力を入れており、最近では、肝細胞癌の手術後１年以内の再発を遺伝子診断により正確に予測できるシステムや、遺伝子多型によるより精度の高い毒性予測チップの開発を産学共同研究で行っています。

大学病院は、最先端の治療の実施、先進医療の開発、そして卒前・卒後の医学教育を行うことが使命です。教室の雰囲気は、一言でいえば“自由闊達”。「王道を行け!」という教室の方針のもと、自由かつ柔軟な発想で、「世界に問え!」「科学する外科医たれ!」と自問自答しながら、患者さんに対し常に最善の治療を提供できるアカデミックサージョンとなるべく、教室員一丸となって、日夜努力をしております。

回診風景

鏡視下手術

開腹手術

整形外科学分野（旧 整形外科学）
Orthopedic Surgery

HP http://ds0.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~y-ortho/　y-ortho@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日現在

教授名	田口 敏彦
分野のメンバー	田口 敏彦、村松 慶一、小笠 博義、目 昭仁、寒竹 司、徳重 厚典、橋本 貴弘、今城 靖明、鈴木 秀典、関 万成、今釜 崇、吉田 佑一郎、富永 康弘、西田 周泰
医学科担当科目	運動器病態系、リハビリ・緩和・終末期医療、自己開発コース、修学論文テュートリアル、AMRA、臨床実習
付属病院診療科	整形外科
居室	臨床研究棟３階
TEL / FAX	0836-22-2268 / 0836-22-2267

分野の紹介

我々山口大学整形外科分野は、中国・四国地区のなかではじめて整形外科学講座が開設された伝統と歴史を持つ教室です。1948年に京都大学整形外科の伊藤鐵夫先生が初代教授として着任され、1957年からは服部奨教授、1983年からは河合伸也教授、2004年から田口敏彦教授が就任し、今年2013年（平成25年）は開講65周年になります。

整形外科といえば、まず骨折と思われる方も多いと思いますが、我々が対象としているのは、骨、筋、靭帯、神経などの運動器全てであり、部位では脊椎・脊髄から骨盤、上肢（肩、肘、手、手指）、下肢（股、膝、足、足指）など広範囲に及びます。これらに機能障害をもたらすのは先天性疾患、けが、炎症、腫瘍、加齢変性等があり、新生児から高齢者まで全年齢層が対象になります。治療内容は多様で患者数が極めて多いので、整形外科の先生はいつも忙しそうにしているわけです。

現在大学の診療、研究、教育は、田口教授、村松准教授、小笠講師、目講師、寒竹講師を中心に8名の助教、9名の医員、大学院生で行っています。多岐に渡る疾患に対応するため、当科では脊椎、上肢、腫瘍、下肢、外傷、の各専門診療班に分かれ、若い医員の先生が各分野を回りながら全ての分野に精通できるようにしています。

脊椎、脊髄班は、腰部脊柱管狭窄症、頚椎での脊髄圧迫病変による四肢麻痺、脊髄腫瘍などを対象に、年間160例ほどの手術が行われています。ご存知のとおり脊髄は中枢神経であり、一度損傷を受けると回復はあまり期待できません。当教室では，重度脊髄障害に対する脊髄再生治療法の開発研究を行っています。脊椎、脊髄バイオメカニクス班は、3次元有限要素法を使用し脊髄内に生じるひずみや応力分布などの解析する研究を行っています。

上肢診療班は、外傷、マイクロサージャリーを用いた組織移植や肩腱板損傷など年間250例以上の手術症例があります。研究では怪我で腕をなくした患者さんに脳死ドナーから腕を移植する実験を行っています。下肢診療班は、股関節や膝関節の全人工関節置換手術を中心に年間150例の手術件数があります。以前は15年くらいで壊れていた人工関節が30年近く機能を維持できることが期待されています。

我々の教室が目指しておりますのは、当科ホームページにも掲載していますが、「患者さんに生涯を通じて豊かで安心できる生活をサポートすること」です。今後も我々整形外科教室は、常に豊かな人間性と高い倫理観を持ち、患者さんにはいつも温かい応接に徹し、そして最高水準の医療を提供することを目標とします。

火曜日朝の教授回診

研究カンファレンス

人工関節置換手術

皮膚科学分野（旧 皮膚科学）
Dermatology

HP http://dermatology.med.yamaguchi-u.ac.jp/ ✉ mmuto@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日現在

教授名	武藤 正彦
分野のメンバー	武藤 正彦、一宮 誠、中村 好貴、山口 道也、柏木 圭介、若松 研弥、根本 圭
医学科担当科目	皮膚病態系、膠原病・アレルギー病態系、自己開発コース、修学論文テュートリアル、AMRA、臨床実習
付属病院診療科	皮膚科
居室	臨床研究棟 8 階
TEL	0836-22-2270 FAX 0836-22-2270

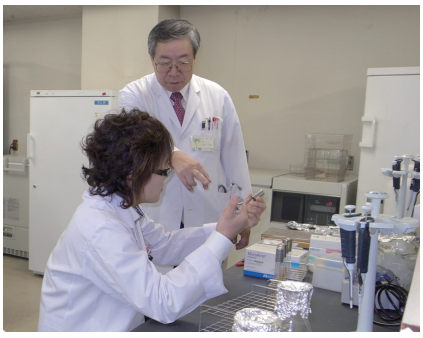
分野の紹介

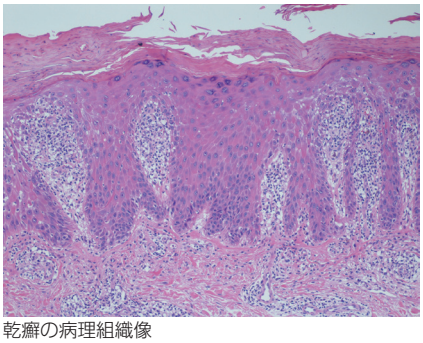
皮膚を診て診断を下し、そして病態に合った治療が開始されます。皮膚病は、医師のみならず患者自身の眼にも映るものであるため、物としての皮膚病のみならず、患者の内心にも気をつかいながら診療しなければならないという、身体と心の二つの面を同時に診ていく技術を要します。皮膚病のもう一つの特徴は、内臓病変が皮膚に投影されたものであることがしばしばあるということです。例えば、糖尿病あるいはC型ウイルス性肝炎などがあれば、多彩な皮膚病がほぼ時を同じくして皮膚表面に認められます。大人から子供に至るまでの幅広い年齢層の患者を対象とします。このように、皮膚病を理解するためには、皮膚科学だけの知識では不十分であり、内科学や外科学あるいは産婦人科学や小児科学など、広範囲の医科学の知識を必要とする特徴があります。さらに、高齢化社会を反映し、高齢者での皮膚癌が漸増しつつあります。

当教室では、皮膚癌の中でも手強い悪性黒色腫（俗にホクロのがんと称される）の発癌プロセスの分子メカニズムの解析に力を入れています。この研究の中から、新薬の開発に向けた新たな知見が得られることを期待しています。治療研究の面では、悪性腫瘍の治療で避けて通れないリンパ節郭清に関して、侵襲の少ない内視鏡を用いたリンパ節郭清術の開発に取り組んでいて、その研究の一端は、最近ヨーロッパの学会誌に報告しました。その他、炎症性皮膚疾患の代表である乾癬（psoriasis）の病因解明を、ゲノムレベルで長年にわたり解析を続けています。名古屋大学との共同研究になりますが、乾癬の炎症を惹起する働きを持つ好中球に特有な遺伝子異常（IL36RN）が存在することをごく最近発見し、厚生労働省難病研究班総会で発表しました。新規治療法の開発や発症予防に役立てられるように、今後研究を進めていく予定です。

以上のような現状のもとに、「優れた医術を実践できる経験と叡智を身につけた医療人を育成する」ことを当教室の理念に掲げ、世界水準の医療を提供できるように、教室員一丸となって努力しています。

手術の様子


実験風景


乾癬の病理組織像

泌尿器科学分野（旧 泌尿器科学）
Urology

HP http://urology-yamaguchi.jp/　　surol@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日現在

教授名	松山 豪泰
分野のメンバー	松山 豪泰、内山 浩一、白石 晃司、長尾 一公、藤川 公樹、松本 洋明、松村 正文、磯山 直仁、井上 亮、山本 義明
医学科担当科目	腎・尿路病態系、男性生殖器病態系、自己開発コース、修学論文テュートリアル、AMRA、臨床実習
付属病院診療科	泌尿器科
居室	臨床研究棟８階
TEL	0836-22-2275　FAX　0836-22-2276

分野の紹介

泌尿器科とは、副腎、腎臓、尿管、膀胱、尿道などの後腹膜腔臓器および精巣、前立腺などの男性性腺疾患に対して、主に外科的治療を行なう専門性の高い分野です。人口の高齢化に伴って、前立腺癌、膀胱癌や腎臓癌が増加し、排尿障害を有する患者さんも増加しています。当科の臨床の3本柱は、①尿路性器悪性腫瘍、②腎代替療法、③男性不妊症・小児泌尿器科です。①は膀胱温存療法や5-ALAを用いた光力学的診断・治療などを、②は腎移植を中心としCAPDや腎代替療法選択外来などを、③は非閉塞性無精子症に対するホルモン治療などを中心に活発に取り組んでいます。いずれの分野も、ユニークな治療・診断法として国内外から注目されています。そのほかにも、女性に特有な尿失禁や膀胱瘤などを治療する女性泌尿器科も、県内で最も多い治療症例数を誇っています。

研究面では、①は尿路性器悪性腫瘍の予後予測マーカーの検索を中心とし研究を継続し、国内外で多くの賞を受賞しています。膀胱癌における中心体複製異常の研究は、世界に先駆けて報告され（写真）、特許（国内）も取得しました。②は腎虚血再灌流後の腎障害メカニズム解明とその回避という臨床に則した研究を行っています。③は男性不妊症の原因疾患である精索静脈瘤の基礎的研究を中心に行い、世界的な評価を得ています。

これらの疾患に対して現在行なわれている治療、診断の改良および疾患発生原因を解明するために、得られた治療結果を正しく理解し、臨床的分析および分子生物学的手法を用いて研究することを理念の一つに挙げ、外国(特にカナダ、オランダ、スウェーデン)との継続的な交流を盛んに行っているのも当分野の特徴で、現在カナダに留学生を送っています。

泌尿器科の特徴は、アットホームな雰囲気でオンとオフの切り替えをしっかりするところです。年１回の医局旅行（写真）や飲み会、同門会ゴルフコンペでは大いに盛り上がります。興味のある方は、是非ホームページをご参照ください。

国際的に評価されている研究

オンとオフを切り替えて・スタッフ写真

眼科学分野（旧 眼科学）
Ophthalmology

HP http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~eye/　　adminoph@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日現在

教授名	園田 康平
分野のメンバー	園田 康平、鈴木 克佳、木村 和博、森重 直行、柳井 亮二、山田 直之、寺西 慎一郎、折田 朋子
医学科担当科目	眼・視覚病態系、自己開発コース、修学論文チュートリアル、AMRA、臨床実習
付属病院診療科	眼科
居室	臨床研究棟 7 階
TEL	0836-22-2278　FAX　0836-22-2334

分野の紹介

眼科学分野は、眼球及びその付属器の生理学及び疾患病態学を担当し、診療分野としては視機能を障害する多くの疾患の治療を担当しています。眼球は複雑な構造を有し、全ての構造が協調的かつ合理的に機能することによって視機能は維持されています。従って、眼組織の一部の機能異常や構造異常が眼球全体の機能障害を来し、視機能障害の原因となります。

眼科学では、眼球及びその付属器の正常構造ら生理機能を研究解析し、さらに疾患における病態生理を解明することにより治療法の確立を追求しています。

【難治性網膜硝子体疾患における線維増殖膜形成機序および治療法の開発】

糖尿病網膜症、網膜剥離、加齢黄斑変性などの網膜硝子体疾患は、近年本邦で有病率が増加の一途をたどる疾患であり、その治療の困難さが問題となっています。中でも、網膜脈絡膜における線維増殖膜形成が、視力予後に非常に悪影響を及ぼすことが判っています。我々は，眼炎症がその病態に大きく関与していると考え、炎症性細胞の関与や、その制御による治療法の開発に取り組んでいます。また、iPS細胞から網膜色素上皮細胞を誘導するシステムを取り入れ、病態解明への応用や治療への応用を検討しています。

【広義眼炎症疾患に関与するケミカルメディエーターの網羅的解析】

ぶどう膜炎や糖尿病網膜症などに代表される眼炎症性疾患での眼内組織、前房水、硝子体液を用いたケミカルメディエーターの網羅的解析行い、その発症機序の解明、新規治療法の開発を進めています。また、ぶどう膜炎では実験ぶどう膜炎モデルを用いて新たな発症に関与する標的分子を検出し、科学的根拠に基づく免疫学的治療法の開発を目指しています。

【難治性角膜疾患に対する点眼治療の開発と臨床応用】

神経伝達物質の一つであるサブスタンスPとインスリン様成長因子-1の合剤投与が難治性遷延性角膜上皮欠損の治療に有効であること、またサブスタンスP及びインスリン様成長因子-1それぞれの有効最小必須配列FGLM-NH2とSSSRを同定し、同様の有効性を証明してきました。さらに、糖タンパクの一つであるフィブロネクチン由来ペプチドPHSRNに上皮欠損治癒促進機能があることを示し、実際の遷延性角膜上皮欠損の治療に有効であることを証明しました。これらの薬剤の角膜上皮細胞に対する作用機序を解明しながら、臨床での有効性をさらに詳細に解析しています。

【角膜実質の構造解析及び疾患眼における異常構造の検出】

角膜の大部分を構成する角膜実質は、角膜の剛性を担いまた角膜の形状維持という点からも重要な部分です。その構造異常は直接的に視力に影響するため、疾患眼における構造異常の検出は疾患の病態解明に重要な要素となります。角膜実質を構成するコラーゲン線維の3次元構造を解析し、正常眼及び疾患眼での特徴を解析しています。

【緑内障手術後の瘢痕抑制治療法の開発】

緑内障は有病率が高く、時に外科的な治療が必要になる疾患です。手術成績を向上させるには、緑内障手術後の瘢痕形成の制御が鍵となります。我々は性ホルモンに着目し、緑内障手術後の瘢痕形成のメカニズムの解析と治療法の開発を行っています。

【抗緑内障薬の効果に関する疫学研究】

有病率の高い緑内障を治療するにあたり、抗緑内障薬の点眼は必須のものとなります。しかしながら、その効果は患者個人ではなく、大規模な母集団を調査して統計学的にその有用性を検討する必要があります。抗緑内障薬の効果について多施設大規模スタディを行う予定です。

外来での視力検査

外来での診察の様子

硝子体手術の様子

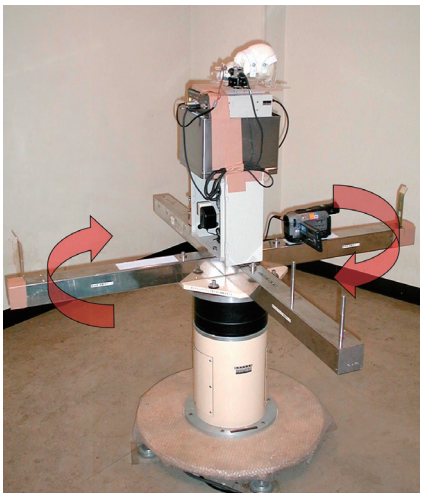
耳鼻咽喉科学分野（旧 耳鼻咽喉科学）
Otolaryngology

HP http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~ent/

平成26年5月1日現在

教授名	山下 裕司
分野のメンバー	山下 裕司、下郡 博明、原 浩貴、菅原 一真、橋本 誠、御厨 剛史、廣瀬 敬信、福田 裕次郎
医学科担当科目	耳鼻・口腔・咽喉病態系、自己開発コース、修学論文チュートリアル、AMRA、臨床実習
付属病院診療科	耳鼻咽喉科
居室	臨床研究棟 7 階
TEL	0836-22-2281
FAX	0836-22-2280

分野の紹介

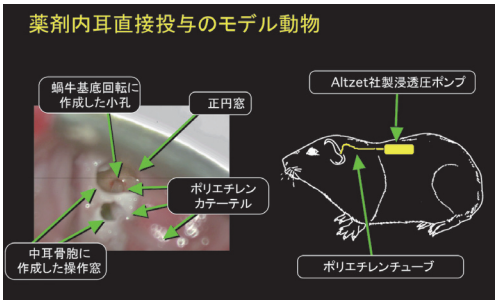

山口大学式持続過重力負荷装置

耳鼻咽喉科学分野では、耳鼻咽喉科の診療で扱う領域に関する基礎研究、臨床研究を行っています。

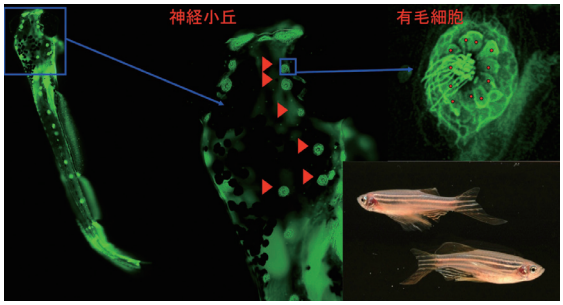
基礎研究として、教室独自に開発した平衡障害や難聴の動物モデルを用いた研究を行っています。平衡医学に関しては、末梢前庭器の可塑性について研究をすすめ、末梢前庭器の機能を回復させる治療の開発などに取り組んでいます。聴覚に関しては、騒音性難聴や老人性難聴のモデル動物を用い、酸化ストレスやフリーラジカル、炎症性サイトカインとの関連について、内耳障害の機序の解明を行っています。また、本学医化学分野と連携して熱ショック応答を応用した内耳感覚細胞保護に関する研究をすすめています。さらに、サプリメントであるコエンザイムQ10や赤ワインなどに含まれるポリフェノールなどに注目し、老人性難聴の予防などアンチエイジング効果についても研究を行っています。

臨床研究として、めまい部門では、赤外線CCDカメラと教室で開発した独自のプログラムによる眼振解析システムについて、多数の学会・論文発表をしています。睡眠時無呼吸・いびき部門は、ポリソムノグラムやいびきの音響解析などを通じて的確な閉塞部位診断を行い、CPAP治療から手術まで治療方法を決定する方法を開発し、国内外で注目されています。その他、中耳炎外来は、鼓室形成術を中心とする耳科手術の成績の向上を目指し、手術方法の改良を研究しています。副鼻腔炎・アレルギー性鼻炎部門では、内視鏡下副鼻腔手術におけるナビゲーションシステムの導入、粘膜弁を用いた上顎洞側壁開窓術や蝶形骨洞手術の工夫の他、好酸球性副鼻腔炎などの難易度の高い手術にも治療成績の向上を目指しています。内視鏡下の手術は，副鼻腔炎にとどまらず、悪性腫瘍を含めた腫瘍、視器や頭蓋底等副鼻腔周辺領域への応用にも取り組んでいます。頭頸部腫瘍部門では、治療成績の向上とともに、機能的な再建手術による手術後の患者のQOLの向上を目指しています。PETを用いた診断や治療効果判定、超選択的動注や最近は周囲の正常組織への照射を減らし、より強い放射線を腫瘍に照射できる強度変調放射線治療（IMRT）を組み入れた新たな治療も行っています。

耳鼻咽喉科学は、扱う分野が多岐にわたりますが、各教員がそれぞれの部門を担当し、より高い専門性（サブスペシャルティ）をもって研究を行っています。



浸透圧ポンプを用いた薬剤内耳直接投与モデル



ゼブラフィッシュの側線器有毛細胞を用いた薬剤のスクリーニング

放射線医学分野（旧 放射線医学）
Radiology

HP http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~radiants/toppage.html　✉ yuradpst@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日現在

教授名	松永 尚文
分野のメンバー	松永 尚文、清水 建策、岡田 宗正、古川 又一、飯田 悦史、國弘 佳枝、田辺 昌寛、原田 祐子
医学科担当科目	放射線医学、自己開発コース、修学論文テュートリアル、AMRA、臨床実習
付属病院診療科	放射線科
居室	臨床研究棟 1 階
TEL	0836-22-2283　FAX　0836-22-2285

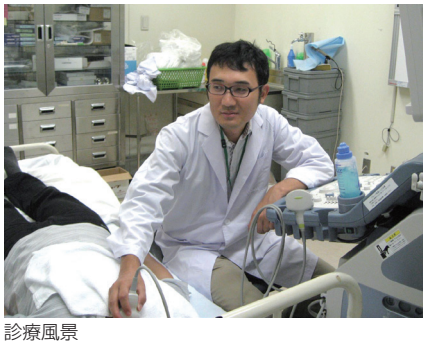
分野の紹介

当分野は、放射線診断学と核医学からなり、幅広い放射線診療領域を基盤に画像診断、および放射線腫瘍学を中心とした組織です。

当分野の研究テーマとして、放射線診断学において、単純X線、超音波、CT、MRI、血管造影、核医学検査などにより、全身諸臓器疾患の画像診断を行っており、日常診療上中心的な役割を果たしています。また、放射線診断の技術を治療に応用したinterventional radiology（IVR）の領域は、主にカテーテル等を用いて低侵襲的に体内から治療するもので、切らずに治す治療法として脚光を浴びており、技術的にも急速な発展をとげつつある将来性のある分野です。核医学では、RI（アイソトープ）を用いて臓器特異的な機能的情報を引き出し、日常診療に貢献しています。全身諸臓器の疾患を対象に形態学的および機能的な診断情報の質的な向上を、さらに低侵襲的な治療成績の向上を目指してたゆまぬ研究を行っています。

また、当分野の教育目標としては、基本的な画像診断を理解し、臨床実習では、実際の放射線診療を体験しながら、生体における諸臓器の画像診断の実際を修得することとしています。

IVR風景

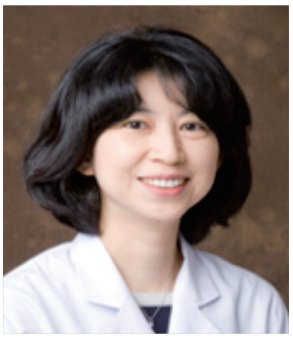

診療風景

読影風景

放射線治療学分野
Therapeutic Radiolog

HP

kshibuya@yamaguchi-u.ac.jp



平成26年5月1日現在

教授名	澁谷 景子
分野のメンバー	澁谷 景子、高橋 昌太郎、椎木 健裕
医学科担当科目	臨床腫瘍学、放射線治療学、自己開発コース、修学論文テュートリアル、AMRA、臨床実習
付属病院診療科	放射線治療科
居室	第 1 中央診療棟 3 階
TEL	0836-22-2966　FAX　0836-22-2471

分野の紹介

当分野は、2011年10月より、放射線治療学を専門とする分野として開講されました。放射線治療学とは、全身諸臓器のほぼすべての悪性腫瘍を対象とし、「放射線腫瘍学」の理論的根拠に基づいた「がん治療」を実践し、新規治療法を開発・研究するための学問領域です。

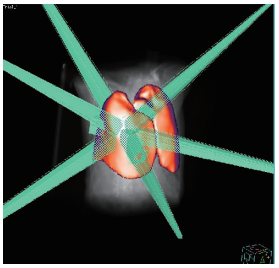
放射線治療の歴史は、1895年RoentgenによるX線の発見に始まります。驚くことに、発見の4年後には「がん」に対するX線治療が試みられました。その後、放射線の特性に基づく「放射線生物学：Radiation Biology」と「放射線物理学: Radiation Physics」の二つの分野が独自に発展し、「腫瘍学：Oncology」と統合して「放射線腫瘍学: Radiation Oncology」としてのひとつの学問体系となりました。そして現在、IT技術の発展と相俟って、放射線照射技術は目覚ましく進歩し、放射線治療は「がん治療の3本柱」のひとつとして、がん診療における確固たる立場を築いております。放射線治療は、それ単独のみならず集学的治療の一環としても、また、根治的治療から対症療法まで幅広くがん診療に関わり、重要な役割を担っています。放射線治療学分野では、腫瘍に関する基礎と臨床の総合的知識を身につけ、個々の腫瘍の特性と患者の病態を正しく判断する能力を養い、かつ放射線の特性に精通し、放射線生物学、物理学の両面から新規治療法の研究・開発を行うことのできる人材の育成を目指しています。

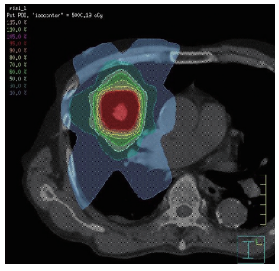
当教室はまだ産声を上げたばかりですが、すでに米国ではがん患者の3分の2が放射線治療を受けています。日本人の2人に1人が「がん」に罹患すると言われる現代において、放射線治療に携わる人材の育成は、我が国における「がん対策」の大きな柱として据えられています。

今後、さらに少子化、高齢化社会を迎える我が国において、「働きながら受けられるがん治療」「高齢者にも優しいがん治療」を開発・実践していくことは、我々の最重要課題のひとつであり、外科医、内科医、放射線治療医、緩和医療を専門とする医師、看護師、薬剤師、あらゆる分野の専門家が勢力を結集させて取り組んでいかなければなりません。

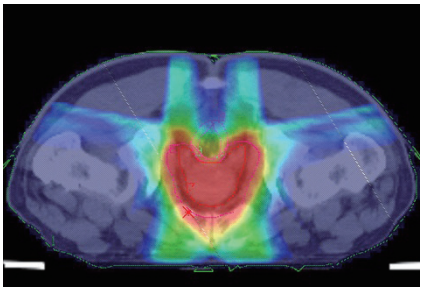
がん診療における新たな知見をこの山口から発信し続けられるよう、先進的な臨床、研究、教育の場を目指しております。

放射線治療に携わるスタッフ
(医師、医学物理士、診療放射線技師、看護師)





早期肺癌への定位放射線治療(ピンポイント照射)



前立腺癌への強度変調放射線治療(IMRT)

産科婦人科学分野（旧 産科婦人科学）
Obstetrics and Gynecology

HP http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~obgyn/　✉ obgyn@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日現在

教授名	杉野 法広
分野のメンバー	杉野 法広、田村 博史、山縣 芳明、末岡 幸太郎、佐藤 俊、浅田 裕美、前川 亮、田村 功、李 理華、城崎 幸介、岡田 真紀、竹谷 俊明、矢壁 和之
医学科担当科目	生殖・婦人科病態系、胎生・周産期病態系、自己開発コース、修学論文テュートリアル、AMRA、臨床実習
付属病院診療科	産科婦人科
居室	臨床研究棟 6 階
TEL	0836-22-2288　FAX　0836-22-2287

分野の紹介

当分野では、地域の基幹病院として一般的な診療を幅広く行い、周産期分野、婦人科悪性腫瘍分野、不妊・生殖内分泌分野で、高度な医療・研究を行っています。

婦人科悪性腫瘍分野では、診断から治療まで包括的な医療を提供するとともに、それぞれの患者さんの状態に応じて、手術療法、化学療法、放射線療法などの治療法を適切に組み合わせた集学的治療を行っています。最新のエビデンスに基づいて当科での治療方針を定め、過不足のない治療を安全に行うことをモットーとしています。初期の子宮頚癌には、“切らずに治す”光線力学的治療という先端医療を取り入れています。県内では2施設でしか行えない子宮頚癌の根治的放射線治療も行っています。

周産期分野では、正常妊娠、ハイリスク妊娠、合併症妊娠に対して、先端の周産期医療を行っています。分娩監視装置や呼吸循環モニターを備えたMFICU（母体・胎児集中管理室）を開設し、これまでにあったNICU（新生児集中治療管理室）と合わせて、24時間体制で母体および新生児の搬送を受け入れています。「最後の砦」としての役割を果たすべく、日々活発に診療にあたっています。

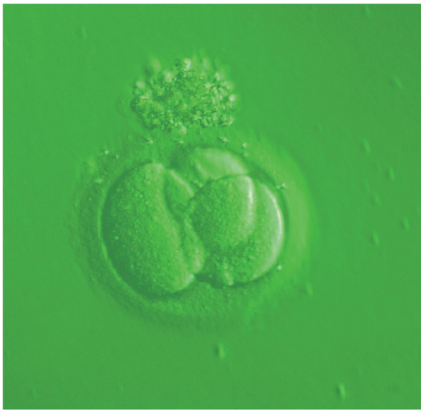
不妊・内分泌分野では，不妊症をはじめ、ホルモン異常、月経異常、子宮内膜症、子宮の先天奇形といった生殖領域の広範な問題に対応しています。若年者の月経異常に関しては、分子生物学的手法を用いたDNAレベルでの高度な診断を独自に行っています。また、不妊症では多岐にわたる不妊原因の正確な診断およびそれに基づいた治療を行っており、一般不妊治療のほか、腹腔鏡や子宮鏡などの内視鏡を用いた治療、さらには体外受精・胚移植といった生殖補助医療も積極的に行っています。

分野内のミーティングとしては、週1回の病棟回診、週2回の病棟カンファレンスと、最新の医療情報を得るための週1回の抄読会を行っています。また、研究室では月1回のリサーチプログレスの発表会を開き、お互いの研究を検討し合っています。

臨床に重点を置く者は病棟や外来で臨床の研鑽に努め、研究に興味を持つ者は大学院に進学します。この大学院でのテーマは、産科婦人科学の中でも最も議論が盛んに行われている最新領域から、本人の希望も考慮して決められます。現在は、大学院修了後も研究に重点を置いている者、大学院で培った知識や思考法を臨床で活かしている者、臨床で卓越した経験と知識によりエキスパートになっている者が、互いに協力して教室を支えています。

胎児3Dエコー像

手術風景


受精卵

麻酔・蘇生・疼痛管理学分野（旧 麻酔・蘇生学）
Anesthesiology

HP http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~anesthy-u/ ✉ anesth@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日現在

教授名	松本 美志也
分野のメンバー	松本 美志也、石田 和慶、飯田 靖彦、若松 弘也、歌田 浩二、松本 聡、山下 敦生、松田 憲昌、金子 秀一、内田 雅人、原田 英宜、山下 理、白源 清貴、鴛渕 るみ、松元 満智子
医学科担当科目	麻酔・ペインクリニック、自己開発コース、修学論文チュートリアル、AMRA、臨床実習
付属病院診療科	麻酔科蘇生科
居室	臨床研究棟３階
TEL	0836-22-2291 FAX 0836-22-2292

分野の紹介

医学の中で、学問体系としての麻酔科学の確立は、歴史的には比較的新しいですが、人間の苦痛のうち大きい位置を占める疼痛に対する医療をになうという点では、医療の原点に通じています。また、麻酔科医療は、外科学の進歩の大きな土台をなしています。今日では、手術の麻酔、疼痛治療のみにとどまらず、集中治療（ICU）、救急医療、緩和医療において、麻酔科医の活躍する場は広いところです。実際に当分野では、手術室の麻酔、ペインクリニック、集中治療、緩和医療の4部門で診療を行っています。大学病院には、県内最後の砦という役割もありますので、我々は治療が難しい患者さんに対しても高度の医療を提供できるように日夜努力をしています。

全身麻酔の導入

教育面では、後期研修まではマンツーマンで麻酔の指導を行っています。最近では、若手が少し下の若手を教える屋根瓦方式を試みています。若手医師のキャリアアップをうまく支援できるように柔軟に対応し、「頼もしいプロフェッショナル」だと評価されるような人材育成に努めたいと思っています。また、人の開発した技術を習得して満足するのではなく、日々の麻酔をよく観察し、よく考え、疑問を解決するresearch mindを身につけられるように、共に考え、共に研究する体制を重視しています。

透視下神経ブロック

当分野の研究目標は、意識、痛覚、呼吸、循環、代謝の調節に関わる神経系の機能を麻酔科学の見地から解析し、手術侵襲に対しての生体防御機構の賦活、危機的状態の治療戦略、難治性疼痛疾患の病態解明・治療戦略を科学的に追求することです。最近特に力を入れているのが、大動脈瘤手術時の脳・脊髄保護です。大動脈弓部置換を行う患者さんでは、人工心肺中の脳循環の維持が非常に重要で、各種モニターを駆使して周術期の脳障害を防ぐことに焦点を当てて研究を続けています。また、胸腹部大動脈瘤の手術では、大動脈遮断中の脊髄虚血により術後に対麻痺を起こすことがあります。当分野では、この十数年間、家兎の脊髄虚血モデルを用いて脊髄虚血の病態と脊髄保護に関して基礎的研究を続けています。臨床医の視点を大切にして、研究を発展させてゆきたいと考えています。

マンツーマンの研修医教育

脳神経外科学分野（旧 脳神経外科学）
Neurosurgery

HP http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~neuro-w1/ ✉ neurosur@yamaguchi-u.ac.jp

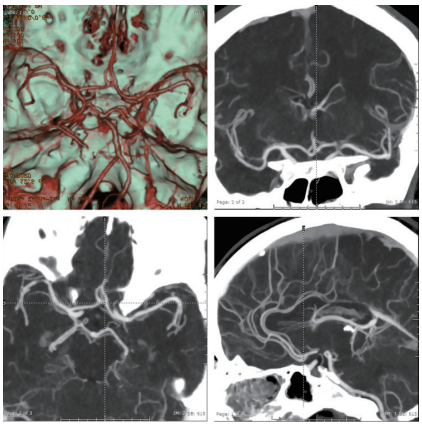
平成26年5月1日現在

教授名	鈴木 倫保
分野のメンバー	鈴木 倫保、野村 貞宏、石原 秀行、小泉 博靖、米田 浩、出口 誠，末廣 栄一、白尾 敏之、井本 浩哉、五島 久陽、岡 史朗、井上 貴雄、貞廣 浩和
医学科担当科目	神経病態系、自己開発コース、修学論文テュートリアル、AMRA、臨床実習
付属病院診療科	脳神経外科
居室	臨床研究棟 4 階
TEL	0836-22-2295 FAX 0836-22-2294

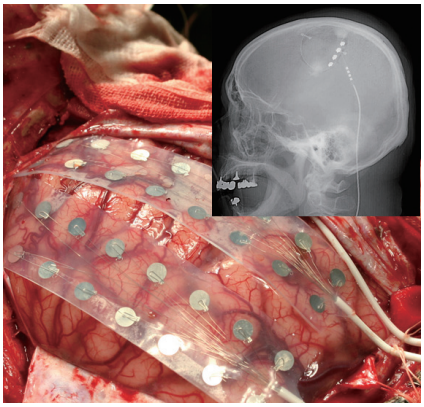
分野の紹介

脳神経外科は脳血管障害、脳腫瘍、外傷、機能的神経疾患、脊椎脊髄疾患、先天性疾患を対象とする診療科です。中でも脳卒中の医療費は癌や循環器系疾患を凌ぐ第一位であり、脳神経外科の社会的ニーズが高いことがわかります。病院が林立する都会では施設毎に専門領域を持っていますが、当教室では全領域に専門家を揃えています。最新の画像診断技術で患部の微小解剖と神経機能を明らかにし、コンピュータ支援手術、血管内手術、内視鏡手術、定位的放射線手術を駆使して治療を行っています。診療の傍ら、くも膜下出血後の脳血管攣縮の解明、神経損傷の低体温脳保護、てんかんの大脳局所冷却療法、脳腫瘍幹細胞研究、神経再生医療の開発等の研究を行っています。

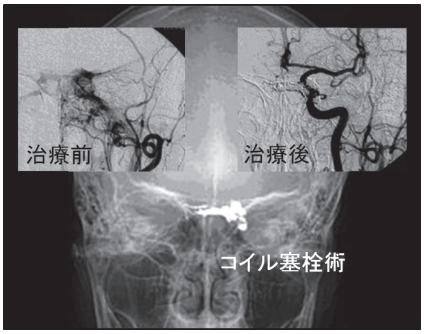
卒後7年目に日本脳神経外科学会の専門医試験受験資格を得ることができます。難関として知られる試験ですが、当教室で学び合格した先輩は県内外で活躍しています。国内･欧米の先端脳神経外科施設との交流を行い、研究を発展させています。脳の神秘性は時代の脳科学ブームによって開かれたものになりました。人類の未来は脳神経外科へ、そして若く柔軟な頭脳を持つ諸君に託されています。



CTを用いた脳血管撮影



頭蓋内電極留置術の術中写真と
術後のレントゲン（右上）



動静脈瘻のコイル塞栓術,術前(左上)と術後(右上)

歯科口腔外科学分野（旧 歯科口腔外科学）
Oral and Maxillofacial Surgery

HP http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~oms0/　　oms0@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日現在

教授名	上山 吉哉
分野のメンバー	上山 吉哉、三島 克章、真野 隆充、原田 耕志、内田 堅一郎、堀永 大樹
医学科担当科目	耳鼻・口腔・咽喉病態系、自己開発コース、修学論文チュートリアル、AMRA、臨床実習
付属病院診療科	歯科口腔外科
居室	臨床研究棟９階
TEL	0836-22-2299　FAX　0836-22-2298

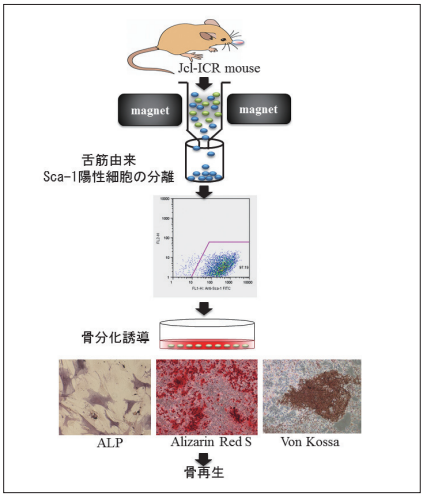
分野の紹介

口腔は消化器の一部であり、その入り口にあたります。また、呼吸の出入り口でもあります。歯科口腔外科が担当する器官は、哺乳、咀嚼、嚥下、そして呼吸等の機能を司る重要な場所です。さらに、我々が担当する顎顔面は、形態、すなわち審美的な要素が強く関わっている領域です。従って、臨床では、顎顔面の形態と機能を適切に評価することが重要であるとの考えのもと、顎顔面の形態と機能の改善、回復に主眼を置いて、口腔癌、口唇・口蓋裂をはじめとする先天異常、顎変形症、顎顔面外傷、顎関節症、口腔粘膜疾患、口腔感染症等の診療にあたっています。また、院内における医科連携では、種々の合併症の予防や在院日数の減少を目指して、外科手術前、化学療法前や移植治療前、コンプロマイズドホストに対する口腔ケアに重点をおいています。

教育面では、歯や歯周組織をはじめ多くの口腔疾患への理解を深め、将来医師として活躍する学生諸君に対して、口腔を診ることができる医師となってもらえるよう取り組んでいます。歯科研修医に対しては、当科独自の研修カリキュラムを設定し、豊富な症例数を生かし、充実した研修が行えるように組まれています。また、日本口腔外科学会認定の指導機関となっており、日本口腔外科学会の専修医・専門医の育成に努めています。

研究面では、トランスレーショナル・リサーチとして実施可能なテーマを中心として、種々の研究を展開しています。特に、顎骨再生に関する研究において実用化を目指した新規生体材料の開発に取り組んでいます。基礎研究として、口腔癌における癌免疫療法の研究、各種抗癌剤における細胞死の研究等を進めており、臨床的研究として、口唇口蓋裂患者の顎顔面の形態と、発音や口唇運動等の口腔諸機能に関する研究を展開しており、また、睡眠時無呼吸症候群の発生機序の解明や治療の効果の評価に関する研究を行っており、臨床におけるエビデンスの発信に努めています。

抗癌剤耐性機構の解明



舌筋由来成体幹細胞を用いた骨再生医療の開発

複数台ビデオカメラを用いた口唇運動解析システム

臨床検査・腫瘍学分野（旧 臨床検査医学）
Oncology and Laboratory Medicine

HP http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~jnaka/kouza/　　rinken@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日現在

教授名	山﨑 隆弘
分野のメンバー	山﨑 隆弘、末廣 寛、酒井 幸平
医学科担当科目	臨床腫瘍学、臨床検査学、自己開発コース、修学論文テュートリアル、AMRA、臨床実習
付属病院診療科	臨床検査科
居室	基礎研究棟 1 階
TEL	0836-22-2337　FAX　0836-22-2338

分野の紹介

当教室の発足は1951年で、我が国最初の臨床病理学講座として誕生しました。その後、講座制の変遷と共に名称が変わり、2008年からは「臨床検査・腫瘍学分野」となりました。

がんの遺伝学的変化の解明により、がんの診断や治療にはめざましい進歩が起こっています。当教室では、がんの診断・治療に関する研究を、検査部や各診療科と協力しながら行っています。

【診断】

がんの予防や早期発見に役立つ検査を開発しています。これまでに、「乳がんのなりやすさ検査」や「便DNA検査による大腸がん検査」を開発してきました。現在、これらの検査を実用化レベルに引き上げるために、産官学共同で研究開発を行っています。ここで得られた研究成果については国際特許出願を行っており、世界規模の臨床検査診断薬確立を目指しています。この他にも、学外の研究グループとの共同研究で新規腫瘍マーカーの開発も行っています。

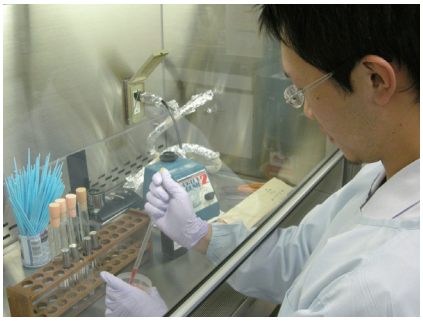
【治療】

これまでに1内科と共同で肝臓がんに対するさまざまな治療法を開発してきました。現在とくに、鉄キレート剤による肝臓がん治療(i-MM therapy)の基礎研究ならびに臨床研究をを精力的に1内科と共同で行っています。この鉄キレート剤は鉄を除去する薬剤であり、従来の抗がん剤とは全く異なります。私どもはこの鉄キレート剤が肝臓がんで効果があることを世界で初めて発見し、2011年The New England Journal of Medicineに報告しています。また他のがんについても応用を検討中です。この鉄キレート剤は抗がん剤ではないので、副作用もほとんどなく「患者さんに優しい治療」が大いに期待できます。さらには、もうひとつの「患者さんに優しい治療」として、がん免疫療法も学内の研究グループと共同で実施しています。

【教育】

検査学（血液、生化学、免疫、微生物、生理機能、輸血、遺伝子など）について、検査部、輸血部、感染制御室スタッフと協力して講義を行っています。また、臨床実習においては、これらの検査に関連する技能習得を目指した教育を行っています。

ＤＮＡ増幅装置



ＤＮＡ実験中

血液細胞観察

救急・生体侵襲制御医学分野（旧 救急医学）
Emergency and Critical Care Medicine

HP http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~amec/index.html　　yoda@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日現在

教授名	鶴田 良介
分野のメンバー	鶴田 良介、小田 泰崇、金田 浩太郎、河村 宜克、藤田 基、宮内 崇、戸谷 昌樹、中原 貴志、末廣 栄一、末廣 晃太郎、小田 哲郎
医学科担当科目	救急医学、自己開発コース、修学論文チュートリアル、AMRA、臨床実習
付属病院診療科	先進救急医療センター
居室	第１病棟３階
TEL	0836-22-2343　FAX　0836-22-2344

分野の紹介

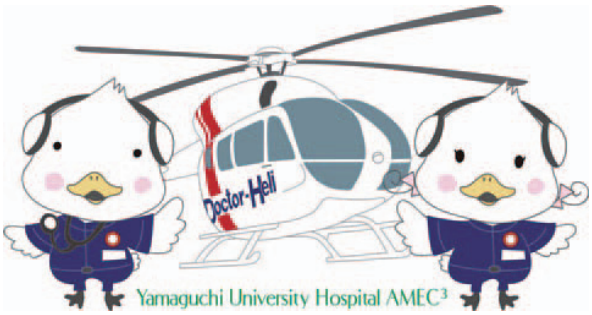
当分野では、傷病そのものや集中治療によるストレスなど、生体に高度の侵襲が加わる病態を解明することにより、最適な診断と治療ができる臨床医を育成することを目的としています。最重症患者の診療から研修を始めることができ、救急専門医や集中治療専門医の資格を取ることもできます。また、広い領域の急性疾患や病態に対応できるようになるので、一般医としての活躍にも役立てることができます。

先進救急医療センター（高度救命救急センター）の治療成績は、重症度を合わせた評価で、実死亡率は3年間連続して米国平均の約半分を記録したこともあり、本邦では最高水準を維持しています。これには、病態を徹底して討論する方式が効を奏しています。また、研究面では、種々の生体侵襲による病態解明のため、動物モデル（脳虚血や敗血症など）を用いた実験を行なっています。

AMEC³集合写真

～現場から集中治療室まで～

初療室（ER）にて



総合診療医学分野
General Internal Medicine

HP

general@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日現在

教授名	
分野のメンバー	小野 咲弥子、實近 百恵
医学科担当科目	臨床医学入門セミナー、臨床医学序説、臨床実習入門、臨床実技基本実習、臨床系特別専門講義、自己開発コース、修学論文チュートリアル、臨床実習
付属病院診療科	総合診療部
居室	第２中央診療棟２階
TEL	0836-22-2686　FAX　0836-22-2687

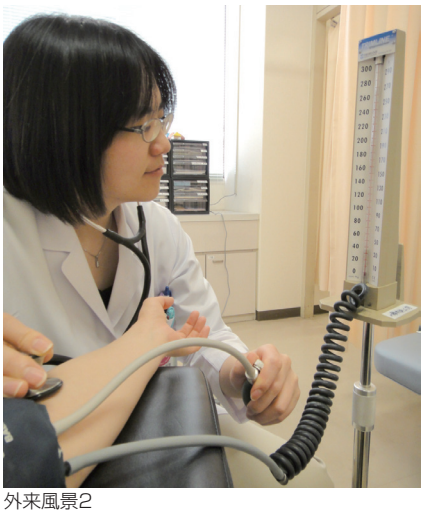
分野の紹介

総合診療の特徴は、「扱う問題の広さと多様性」とされています。内科全般に対応する「一般内科」、子供から成人までを診療の対象とした「家庭医療」、あらゆる症状やcommon diseaseに対応し一次医療を提供する「プライマリ・ケア」、地域の医療や福祉において包括的ケアを主導する「地域医療」の概念を含む言葉です。

総合診療の実践は、良好な患者-医師関係の構築と患者さんからの情報収集が鍵です。患者さんは、複数の疾患や薬歴、経済的な問題や心理的な問題を抱えていることがあるため、初診時は特に情報収集に労力を要します。医療面接で良好な患者-医師関係が構築できると、得られる情報量が多くなりますが、患者さんとの対話の中から、意味のある情報を短時間で抽出していかなければなりません。そこで、医療面接技術や臨床推論が必要となってきます。診察も，基本手技と所見が生じる原理を理解し、応用していくことで多くの重要な情報を得ることができます。当部の総合診療の実践では、『考えて行う医療面接と診察』を診療の基本として大切にしています。

近年の著しい医学の進歩に伴い、臓器や領域に細分化、特化された診療が主流となりましたが、最近では総合診療の重要性が再認識されてきています。進みゆく高齢化社会の中において、１人の患者さんがもつ複数の病態を診療することや、地域単位や家庭単位で関わる医療が、医療の一つのシステムとして期待されているのです。総合診療部では、設立当初より、臓器単位の専門診療の枠組みにとらわれることなく、どのような訴えの患者に対しても、質の高い適切な医療を提供すること、またそのような能力を持つ臨床医の育成を目標として掲げてきました。大学病院では、内科診療部門として一般内科外来の診療を担当しています。入院診療は行っていませんが、どの科を受診すればいいか分からない患者さんや、情報提供書をもたずに来院した患者さんの窓口として、幅広い疾患に対応しています。さらに、この総合診療の実践の場を通して、臨床推論や診断学、外来マネジメントの教育を行っています。

外来風景１


外来風景２

シミュレーター実習にて

医療情報判断学分野
Medical Informatics and Decision Sciences

HP http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~medinfo　mids9@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日現在

教授名	
分野のメンバー	石田 博
医学科担当科目	医療情報・EBM、AMRA
付属病院診療科	医療情報部
居室	第２病棟５階
TEL / FAX	0836-22-2716 / 0836-22-2718

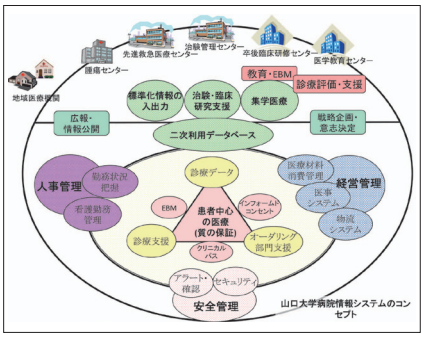
分野の紹介

病院のシステム化を促進し、情報コミュニケーション技術によって診療，教育、臨床研究および病院運営を向上するために設けられました。その目指すところは、良質で高水準の医療とは何かを評価し、有効で効率的な医療が提供できる情報環境を作ることです。

医療情報部では、日常診療に不可欠となった電子カルテ機能の改善、および、作成される診療情報をデータベース化し、病歴データなどの二次利用データベースの構造設計、その利用環境としての集計･解析システムの構築などの実践的応用を進めております。また、様々な問題解決のための情報処理技術を用いた支援に留まらず、情報活用に伴う責任つまり、セキュリティ管理、プライバシー保護などの社会的･倫理的な側面に関する課題に具体的に対応しています。さらに、医療評価に関しては、医療が直面する課題に応じて、二次利用データベースからの情報抽出、“根拠に基づく医療（EBM）”の主要データベースであるMEDLINE、コクランライブラリなどのオンライン情報源を利用した医療技術のシステマティックレビューとメタ解析、判断分析による医療経済評価などを実践しています。

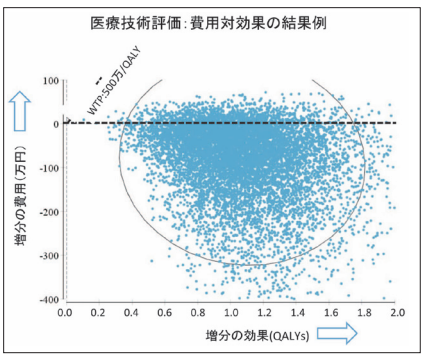
当分野の教育目標は、医学･医療のすべての営みを情報およびシステムという視点で捉え、これらを客観的に評価し最適な行動を選択できる能力を修得することにあります。すなわち、診療･学習･研究において問題の解決に必要な情報の収集と処理の方法を学ぶことを通して問題解決への積極的な姿勢と技能を獲得すること、および、ベッドサイドでの判断や診療態勢をシステムとして捉えることによって制約された条件下で客観的に評価するための知識と情報技術を修得することです。具体的には、コンピュータおよびネットワークの利用能力、判断学および疫学の方法を用いたEBMの理解、医療技術の効果と経済性における効率性の評価、問題解決の目的に応じた診療データベースの再編成と活用支援、地域医療連携を活性化する情報基盤構築の立案、個人情報保護とセキュリティ管理、などが学習課題です。

当分野の研究テーマは、臨床における意思決定のための医療技術評価と情報システムの構築です。診断技術の情報価値の解析、コンピュータシミュレーションを使った治療技術の効果予測、効用分析や経済分析を使った医療技術評価の解析法は、臨床医必携の知識として、また診療ガイドラインや医療政策に根拠を与えるものとして活用されています。



山口大学病院情報システムのコンセプト

電子カルテの基本画面エディタ＆ブラウザ



医療技術評価：費用対効果の結果例

臨床薬理学分野
Clinical Pharmacology

HP http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~yakuzai/　ymns@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日現在

教授名	古川 裕之
分野のメンバー	古川 裕之，尾家 重治
医学科担当科目	薬物治療・処方学、自己開発コース、修学論文テュートリアル、AMRA
付属病院診療科	薬剤部
居室	外来棟 1 階
TEL	0836-22-2667　FAX　0836-22-2705

分野の紹介

診療面では、我々薬剤師は、患者さんに対して安心で安全な薬物治療を提供できるよう積極的な支援を行っています。具体的には、病棟薬剤業務部門、セントラル業務（院内で使用する治験薬を含むすべての医薬品管理、一般調剤・注射薬調剤・一般製剤、医薬品情報管理、抗がん剤の混合調製、薬物治療モニタリング（TDM））と教育研究の3部門の連携により、患者さんの薬物治療における医薬品適正使用の推進に取り組んでいます。

無菌室における抗がん剤の混合調製

特に、2012年4月の診療報酬改定において評価された「病棟薬剤業務」への期待は大きく、その積極的な取り組みが薬剤師に求められています。そこでは、チーム医療メンバーとして安全性情報の収集と医師・看護師等への提供が求められています。また、患者さんに向けては、服薬指導に加えて、継続した観察を通した副作用シグナルの早期発見と適切な対応など、安全管理に焦点を当てた役割が求められています。

患者さんに対する服薬指導と副作用モニタリング

教育面では、医学科と保健学科の両方で「臨床薬理学」講義を担当しており、医薬品の開発過程から市販後医薬品の適正使用までの全プロセスを体系的に教育することを目標に、医薬品・医療機器開発、医薬品・医療機器を用いた臨床研究管理、医薬品使用時の安全管理、医薬品の適正管理、医薬品情報管理、薬物中毒予防に関する教育指導を行っています。

また、山口県出身で全国の大学薬学部で学んでいる学生に対して、11週間の臨床実習指導、さらに県内の薬剤師に対して研修指導を行っています。

病棟における医療チームへの参加

研究面では、「根拠の乏しい“常識”を科学する !!」という視点から、「医薬品使用時の安全管理」、「副作用監視」、そして「感染予防」に注目して、医療現場にすぐに還元できるテーマに取り組み、その成果を広く全国に発信しています。

生命実験医学分野
Institute of Life Science and Medicine

HP http://anim.med.yamaguchi-u.ac.jp/　　animal@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日現在

教授名	村田 智昭（准教授・施設長）
分野のメンバー	村田 智昭、坂井 勇介
医学科担当科目	
付属病院診療科	
居室	臨床実験施設
TEL	0836-22-2306　FAX　0836-22-2412

分野の紹介

当分野は、動物維持施設を兼ねることから、次の3つの業務を行っています。第一に、支援業務として、本学で使用される実験用動物を良好な環境で集中的に飼育・維持・管理することによって、倫理的に再現性のある動物実験が行われるように生命科学実験施設利用者に対して研究支援や指導を行っています。第二に、教育として、実験動物学の講義と実習を担当しています。第三に、研究として、遺伝子改変動物の作出とそれに伴う発生工学的手法の開発・研究を行っています。

現在は、トランスジェニック（TG）動物の作出技術向上に精力を注ぎ、将来本学で新たな人の病気の原因遺伝子が得られたときには、それに関するTGやノックアウト動物を作出することによって、山口大学オリジナルなヒト疾患モデル動物の開発を目指しています。

総合科学実験センター生命科学実験施設

高圧蒸気滅菌装置

倒立顕微鏡

医学教育センター
Center for Medical Education

HP http://eyume.med.yamaguchi-u.ac.jp/index.php　✉ mec01@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日現在

教授名	坂井田 功
分野のメンバー	坂井田 功、藤宮 龍也、白澤 文吾
医学科担当科目	医学入門 1、医学入門 2、プレ臨床実習テュートリアル、医療倫理、臨床倫理テュートリアル
付属病院診療科	実習棟Ａ１階
居室	基礎研究棟 4 階
TEL	0836-85-3747　FAX　0836-85-3747

分野の紹介

医学教育学は、医学・医療と社会との連関を重視して医学教育を包括的に捉え直し、医学教育の実践の改良に努めることを目的としています。現在、医学・医療の著しい高度化と社会の質的な変化により、医学・医療はさらに大きな改革を迫られています。医学・医療が変わらなければならない以上、実際に医療に従事する医療人の養成過程もまた変化を迫られるのは当然のことです。医学教育学は、こうした情勢によって生み出された諸課題に対し応えようとするものです。具体的には、医学・医療の専門的知識と技能の有効な教育方法を開発するのはもちろんのこと、社会に対する幅広い視野と豊かな人間性を有する医学研究者及び医療人を育成できる医学教育を遂行するための理念の設定、具体的カリキュラムや教材・教授法における改善すべき点の調査、その改善法の検討を行っています。

以上のことを念頭に、附属医学教育センターは、本医学部全体で行おうとしている医学教育改革の円滑な実施に貢献することを使命とし、医学教育のためのネットワーク兼シンクタンクとしての機能を果たそうとしています。具体的には、卒前教育を対象とし、アーリー・エクスポージャー、基礎教育、専門教育を経て卒業にいたるまでの抜本的なカリキュラム改革(コース・ユニット制、電子シラバス)および教育方法改革(テュートリアル制)を成功させるために尽力しています。さらに、医学教育を継続的に改善していくために、医学教育に関するシンクタンク的機能も担い、日本国内の各医学部、さらには海外の医療者養成機関のカリキュラムの比較検討を行い、より有効な教材や教育法の開発も目指しています。

ｅＹＵＭＥトップページ

医学教育センター玄関

医学入門の授業風景

地域医療推進学講座
Community Health and Medicine

HP http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~tiiki/front.htm　tiiki@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年5月1日現在

教授名	福田 吉治
分野のメンバー	福田 吉治、中村 浩士
医学科担当科目	地域包括医療修学実習、自己開発コース、修学論文テュートリアル
居室	第 1 中央診療棟 3 階
TEL	0836-22-2194　FAX　0836-22-2195

分野の紹介

当講座は、平成20年4月に開講された地域医療学講座を引き継ぐ形で、平成22年度に開講された山口県の寄附講座です。地域の医師不足やいわゆる医療崩壊が問題となる中、広域的な医療機能連携、県内における医師確保、効率的な医師配置、過疎地の医療を担う総合診療医の養成、広域的な救急医療の支援等に関する研究を行い、地域住民が安心して医療を受けることができる体制づくりに貢献することを目的にしています。

“地域医療マインドをすべての医師に”を合言葉に、地域医療に関する講義、「地域包括医療修学実習」(3年生対象)、へき地・離島等での地域医療セミナー、学生の自主的活動の支援等を通じて、地域医療マインドを持った医師の育成に取り組んでいます。また、高校生を対象にした医療現場体験セミナー、山口県地域医療支援センターや山口大学医学部附属病院医療人育成センター地域医療支援部門と協働した地域特別枠(県医師修学資金貸与者等)へのキャリア支援・相談を実施しています。卒後の医師研修については、山口県医師臨床研修推進センター(山口県医師会内)と協力した地域医療研修、地域の医療機関と協力した総合医育成・確保の体制構築なども行っています。

研究では、医学生の進路に関する意識、山口県の必要医師数の推計、地域医療体制の現状把握などの地域医療に関連した調査に加えて、各教員の専門分野での調査研究を行っています。具体的には、健康の社会的格差・社会疫学、がんや糖尿病・メタボリック症候群の予防を目的とした地域における健康増進施策、循環器疾患、膠原病・リウマチ等についての基礎・臨床研究などです。また、行政等の関連する委員会の委員、地域・学校での講演や健康教室等を通じて、社会・地域貢献も積極的に行っています。

高校生を対象にした体験セミナーの様子

萩での地域医療セミナーの様子

3年生を対象にした地域包括医療修学実習の様子

脂質恒常性の意義を神経系で調べる

大学院について

(1) 沿革

本医学系研究科博士課程は、専攻分野において研究者として目立して研究活動を行う必要な高度の研究能力及びその基礎となる豊かな学識を養うものとし、課程修了者には博士の学位を授与します。平成9年度から、教育方法の特例による昼夜開講制を実施し、社会人の受け入れを行っています。また、平成13年4月からは、従来の医学博士課程〈4専攻〉(4年)に加え、博士前期課程(2年)及び博士後期課程(3年)による応用医工学系専攻(独立専攻)を設置し、医学と工学との有機的統合のもとに、医療・福祉の動向に即した新しい理論と先進的で実践的医療機材の開発と、その推進に必要な人材の育成を目指した教育研究を展開してきました。平成18年4月、医学博士課程においては、統合的医学教育研究の推進という理念を一層押し進めるため、4専攻を2専攻(システム統御医学系、情報解析医学系)に再編統合し、また、医学、工学、理学、農学分野が連携し、生体分子情報解析や先端バイオ技術を応用して、医療・健康に利用できる有用分子の研究開発や臨床応用に貢献する創造的で幅広い視野を持った人材を育成するため、応用分子生命科学系専攻(独立専攻)(博士前期・後期課程)を新たに設置しました。

(2) 専攻

専　攻	領　域	教育研究分野	旧　講　座
システム統御医学系	人体機能統御学	器官解剖学	解剖学第一
		整形外科学	整形外科学
	高次神経科学	機能神経解剖学	解剖学第二
		システム神経科学	生理学第二
		高次脳機能病態学	神経精神医学
	脳・神経病態制御医学	神経内科学	神経内科学
		脳神経外科学	脳神経外科学
		麻酔・蘇生・疼痛管理学	麻酔・蘇生学
	生体侵襲解析・制御医学	法医・生体侵襲解析医学	法医学
		救急・生体侵襲制御医学	救急医学
	医療環境統御医学	環境保健医学	衛生学
		環境統御健康医学	公衆衛生学
		医療環境学	医療環境学
情報解析医学系	構造解析病態医学	病理形態学	病理学第一
		放射線医学	放射線医学
		放射線治療学	
		生命実験医学	(生命科学実験施設)
	生殖・発達医科学	小児科学	小児科学
		産科婦人科学	産科婦人科学
		泌尿器科学	泌尿器科学
	上皮情報解析医科学	歯科口腔外科学	歯科口腔外科学
		耳鼻咽喉科学	耳鼻咽喉科学
		皮膚科学	皮膚科学
		眼科学	眼科学
	生体情報医科学	プロテオーム・蛋白機能制御学	生化学第一
		ゲノム・機能分子解析学	微生物学
		分子薬理学	薬理学
	医療情報解析学	臨床検査・腫瘍学	臨床検査医学
		総合診療医学	(総合診療部)
		医療情報判断学	(医療情報部)
		臨床薬理学	(薬剤部)
応用医工学系	生体シグナル解析医学	医化学	生化学第二
		免疫学	寄生体学
		病態制御内科学	内科学第三
	器官制御医科学	生体機能分子制御学	生理学第一
		器官病態内科学	内科学第二
		器官病態外科学	外科学第一
応用分子生命科学系	先端分子応用医科学	分子病理学	病理学第二
		消化器病態内科学	内科学第一
		消化器・腫瘍外科学	外科学第二

(3) 課程別・専攻別在籍者数

平成26年6月1日現在

課程	専攻		入学定員	在籍者数				
				1年	2年	3年	4年	合計
医学博士課程	システム統御医学系		14	8	5	6	24	43
	情報解析医学系		16	4	9	11	25	49
	合　計		30	12	14	17	49	92
博士前期課程	応用医工学系	医学系		4	4	-	-	8
		工学系		14	17	-	-	31
		小　計	31	18	21	-	-	39
	応用分子生命科学系	理学系		11	15	-	-	26
		医学系		0	0	-	-	0
		工学系		21	21	-	-	42
		農学系		13	16	-	-	29
		小　計	36	45	52	-	-	97
	保　健　学		12	9	16	-	-	25
	合　計		79	72	89	-	-	161
博士後期課程	応用医工学系	医学系		9	8	26	-	43
		工学系		0	2	2	-	4
		小　計	14	9	10	28	-	47
	応用分子生命科学系	理学系		1	0	1	-	2
		医学系		7	9	12	-	28
		工学系		4	6	5	-	15
		農学系		2	1	3	-	6
		小　計	12	14	16	21	-	51
	保　健　学		5	4	3	9	-	16
	合　計		31	27	29	58	-	114
総　合　計			140	111	132	75	49	367

（単位：名）

学位について

山口大学大学院医学系研究科において、学位の授与を受けるには次の方法があります。

Ⅰ　博士課程

(1) 課程博士について

医学博士課程に4年以上（博士後期課程応用分子生命科学系専攻、応用医工学系専攻及び保健学専攻については3年以上）在籍し、所定の単位を修得し、かつ、必要な研究指導を受けたうえ独創的な研究に基づく学位論文を提出してその審査及び学位論文を中心とする最終試験に合格すること。

(2) 論文博士について

医学系研究科に論文を提出してその審査及び試験に合格し、かつ、博士課程を修了した者と同等以上の学力を有することを確認された者に授与される。

なお、学位申請には研究歴等種々制約があるので、指導教員に相談すること。

Ⅱ　修士課程

医学系研究科の博士前期課程応用分子生命科学系専攻、応用医工学系専攻及び保健字専攻に2年以上在籍し、所定の単位を修得し、かつ、必要な研究指導を受けたうえ独創的な研究に基づく学位論文を提出してその審査及び学位論文を中心とする最終試験に合格すること。

Ⅲ　学位授与者数

区 分	旧制			
年 度	33	34	35	合計
授与数	43	74	373	490

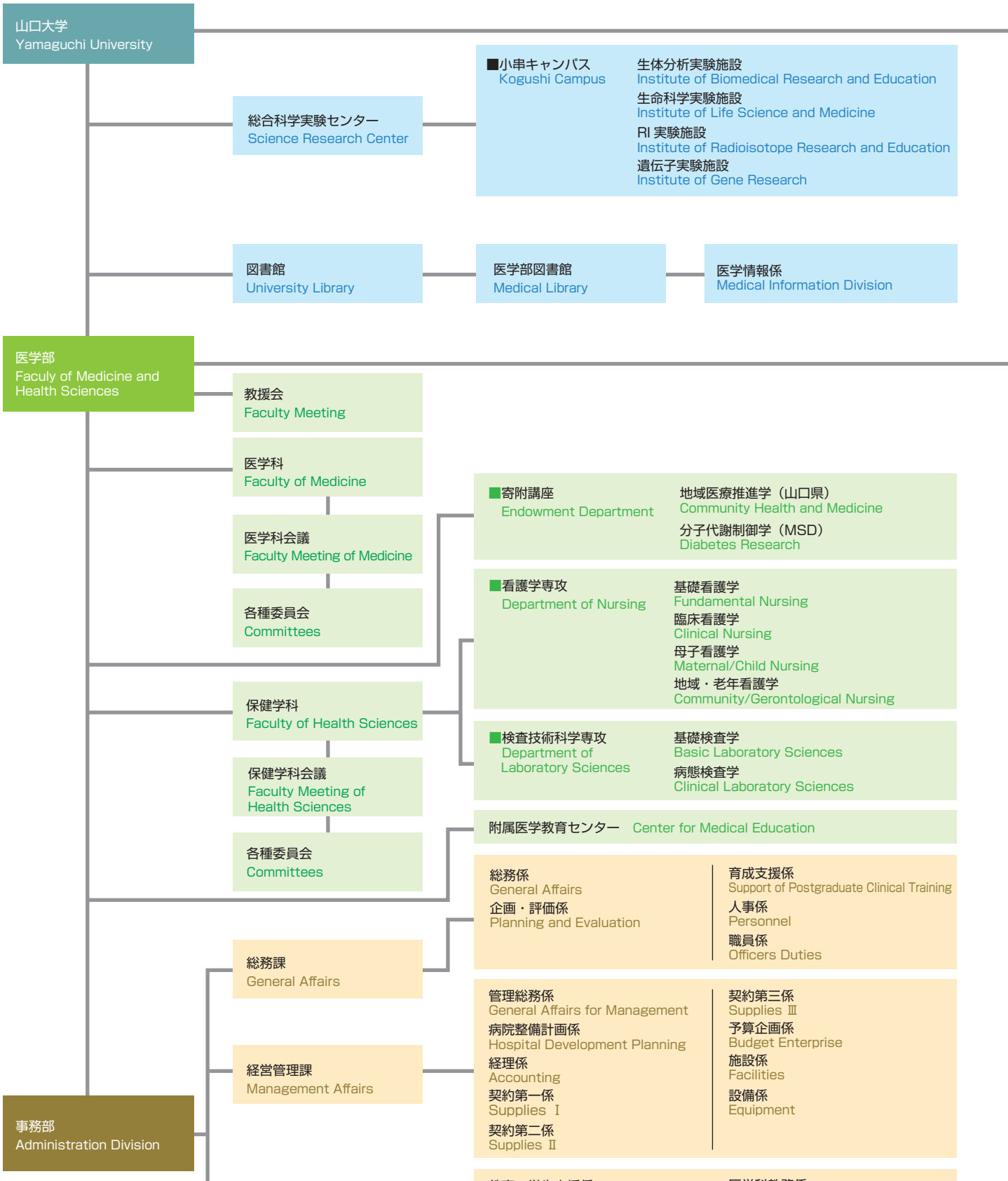
区 分	県立医科大学新制						
年 度	37	38	39	40	41	42	合計
課程博士	7	18	11	16	11	32	95
論文博士	2	9	6	13	25	2	57

区 分	医学研究科																								
年 度	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	元	2	3
課程博士	4	3	9	28	23	11	12	5	6	11	10	3	5	23	18	16	23	30	16	30	23	32	36	40	32
論文博士	9	12	21	30	15	9	18	23	26	22	24	32	27	34	39	38	42	23	35	38	36	45	34	53	25

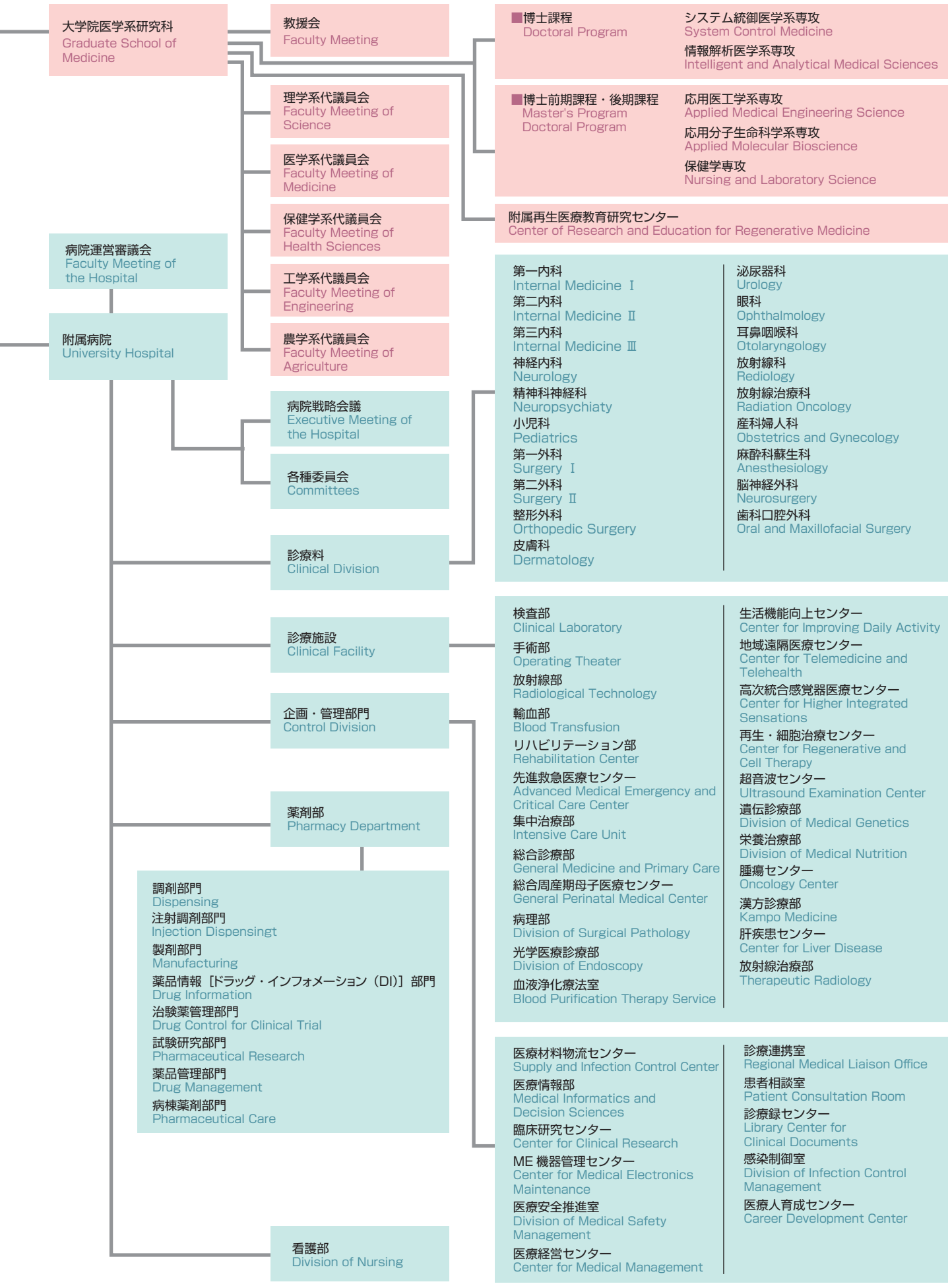
区 分	医学研究科												医学系研究科											
年 度	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	計	合計
課程博士	28	25	38	45	41	23	46	31	45	38	57	41	49	38	49	50	46	52	43	55	36	35	1,360	
論文博士	23	24	18	29	20	18	27	25	20	13	13	29	24	10	5	8	16	12	6	10	2	6	1,068	3,281
修士										4	31	33	33	36	58	96	104	92	105	92	85	84	853	

（単位：名）

機構図


山口大学
Yamaguchi University
総合科学実験センター
Science Research Center
■小串キャンパス
Kogushi Campus
生体分析実験施設
Institute of Biomedical Research and Education
生命科学実験施設
Institute of Life Science and Medicine
RI 実験施設
Institute of Radioisotope Research and Education
遺伝子実験施設
Institute of Gene Research
図書館
University Library
医学部図書館
Medical Library
医学情報係
Medical Information Division
医学部
Faculy of Medicine and Health Sciences
教授会
Faculty Meeting
医学科
Faculty of Medicine
医学科会議
Faculty Meeting of Medicine
各種委員会
Committees
■寄附講座
Endowment Department
地域医療推進学（山口県）
Community Health and Medicine
分子代謝制御学（MSD）
Diabetes Research
■看護学専攻
Department of Nursing
基礎看護学
Fundamental Nursing
臨床看護学
Clinical Nursing
母子看護学
Maternal/Child Nursing
地域・老年看護学
Community/Gerontological Nursing
保健学科
Faculty of Health Sciences
保健学科会議
Faculty Meeting of Health Sciences
各種委員会
Committees
■検査技術科学専攻
Department of Laboratory Sciences
基礎検査学
Basic Laboratory Sciences
病態検査学
Clinical Laboratory Sciences
附属医学教育センター Center for Medical Education
事務部
Administration Division
総務課
General Affairs
総務係
General Affairs
企画・評価係
Planning and Evaluation
育成支援係
Support of Postgraduate Clinical Training
人事係
Personnel
職員係
Officers Duties
経営管理課
Management Affairs
管理総務係
General Affairs for Management
病院整備計画係
Hospital Development Planning
経理係
Accounting
契約第一係
Supplies Ⅰ
契約第二係
Supplies Ⅱ
契約第三係
Supplies Ⅲ
予算企画係
Budget Enterprise
施設係
Facilities
設備係
Equipment
学務課
Educational Affairs
教育・学生支援係
Education and Student Support
大学院教務係
Education Affairs for the Gradute School of Medicine
医学科教務係
Education Affairs for the Faculty of Medicine
保健学科教務係
Education Affairs for the Faculty of Health Sciences
医事課
Medical Affairs
医事係
Health Care Accounting
診療報酬係
Medical Treatment Fees
診療情報管理係
Medical Information Management
収入係
Cashier
医療情報係
Clinical Informatics
医療安全係
Medical Safety

平成26年5月1日現在
As of May 1.2014



YAMAGUCHI UNIVERSITY
山口大学

山口大学医学部医学科・附属病院

Yamaguchi University Faculty of Medicine and Health Sciences
Yamaguchi University Hospital

〒755-8505　山口県宇部市南小串一丁目1番1号
1-1-1 Minami Kogushi Ube 〒755-8505
TEL（0836）22-2111／FAX（0836）22-2113

医学系研究科ホームページ
http://ds22.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~igakubu/medic/index.cgi

医学部ホームページ
http://www.med.yamaguchi-u.ac.jp/

附属病院ホームページ
http://www.hosp.yamaguchi-u.ac.jp/

平成26年7月発行
Publication of July, 2014